

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)

県営畠地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区(道重工区)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

道 重 遺 跡

1990年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、前川・安楽川の流域を中心に約170ヶ所の周知の遺跡が知られております。

近年、宅地開発や農業基盤整備事業の増加に伴い、これらの遺跡の緊急確認調査も又急増しています。

今回調査しました道重遺跡の確認調査、並びに発掘調査も県営畠地帶総合土地改良事業の実施に先立って行われたものです。

ここにその調査結果を報告書として刊行いたしますが、この資料が歴史解明の一助となり、文化財の保護と学術研究のために広く活用されれば幸いです。

発刊にあたり、発掘を担当された各調査員はじめ指導者、作業協力者の皆様、又調査に御協力を頂きました土地所有者・並びに関係各位に対し、心よりお礼申し上げます。

平成2年3月

志布志町教育委員会

例　　言

1. 本報告書は県営畠地帯総合土地改良事業曾於東部二期地区（道重工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鹿児島県農政部（大隅耕地事務所）の委託事業として、志布志町（志布志町教育委員会）が受託し、実施したものである。
3. 発掘調査は昭和63年度、平成元年度に実施し、平成元年度に整理作業を行った。
4. 本書で用いたレベル数値はすべて海拔絶対高である。
5. 遺物はすべて通し番号とし、挿図、図版とも一致する。
6. 本書の執筆は次のとおりである。
第Ⅰ、Ⅱ章……………米元史郎
第Ⅲ～VI章……………井ノ上秀文
第VII章……………堂込秀人
7. 本書の編集は米元、井ノ上、堂込がおこなった。
8. 遺物は志布志町教育委員会が保管し、展示・活用する予定である。
9. IV章確認調査の遺物出土状況凡例

- ▲ V層出土遺物
- VI層出土遺物
- VI層礫

目 次

序文

例言

目次

第Ⅰ章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査の組織.....	1
第3節 調査の経過.....	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	6
第Ⅲ章 層位.....	8
第Ⅳ章 確認調査.....	11
第1節 調査の概要.....	11
第2節 各トレンチの調査.....	12
第3節 まとめ.....	24
第Ⅴ章 A地点の調査.....	26
第1節 調査の概要.....	26
第2節 層位.....	28
第3節 VI層の調査.....	28
第4節 V層の調査.....	30
第5節 まとめ.....	45
第VI章 C地点の調査.....	46
第1節 調査の概要.....	46
第2節 層位.....	46
第3節 出土遺物.....	46
第4節 まとめ.....	53
第VII章 B地点の調査.....	54
第1節 調査の概要.....	54
第2節 造構.....	54
第3節 遺物.....	54
第4節 まとめ.....	68

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表.....	7	第2表 B地点石器計測表.....	66
-------------------	---	-------------------	----

挿 図 目 次

第1図 道重遺跡周辺の遺跡.....	8	第3図 調査区と周辺の地形図.....	9
第2図 土層模式柱状図.....	8	第4図 トレンチ配置図及び各地点位置図	10

第5図	11、18、14、20トレンチ	11	第31図	A地点出土遺物(9)	39
第6図	19、12、10トレンチ	12	第32図	" (10)	40
第7図	8、12、10トレンチ出土遺物	13	第33図	" (11)	41
第8図	4、22、1、15トレンチ	14	第34図	" (12)	42
第9図	4トレンチ出土遺物(1)	16	第35図	" (13)	43
第10図	" (2)	17	第36図	" (14)	44
第11図	" (3)	18	第37図	" (15)	45
第12図	" (4)	19	第38図	C地点土層断面図	46
第13図	16、2、3、7トレンチ	20	第39図	C地点遺物出土状況	47
第14図	8、9、17、6、13、5、23トレンチ	21	第40図	C地点出土遺物(1)	48
第15図	16、2、5トレンチ出土遺物	22	第41図	" (2)	49
第16図	21、24トレンチ	23	第42図	" (3)	50
第17図	23、21トレンチ出土遺物	24	第43図	" (4)	51
第18図	施工計画図	25	第44図	" (5)	52
第19図	A地点土層断面図	26	第45図	B地点発掘区全体図	55
第20図	VI層遺物出土状況	27	第46図	B地点南区遺物出土状況	56
第21図	集石	28	第47図	B地点北区上層遺物出土状況	57
第22図	A地点出土遺物(1)	30	第48図	B地点北区・下層遺物出土状況	58
第23図	" (2)	31	第49図	1号集石実測図	59
第24図	" (3)	32	第50図	北区Pit及び遺物出土状況	59
第25図	V層遺物出土状況 V層最下面地形図	33	第51図	B地点出土土器(1)	60
第26図	A地点出土遺物(4)	34	第52図	" (2)	61
第27図	" (5)	35	第53図	B地点出土石器(1)	62
第28図	" (6)	36	第54図	" (2)	63
第29図	" (7)	37	第55図	" (3)	64
第30図	" (8)	38	第56図	" (4)	65

図 版 目 次

図版 1	遠景・調査風景 11、18、14、19、12、10 トレンチ	69	図版 8	出土遺物(221~230)・C地点遠景・ 遺物出土状況・土層断面	76
図版 2	4、22、1、15、16、2、3 トレンチ	70	図版 9	土層断面・出土遺物(231~312)	77
図版 3	7、8、9、17、6、13、23、21 トレンチ	71	図版10	B地点全景・調査風景	78
図版 4	21、24トレンチ・出土遺物(1~81)	72	図版11	集石・北区土層・遺物出土状況	79
図版 5	A地点遠景・調査風景・遺物出土 状況・集石	73	図版12	遺物出土状況・出土遺物 (313~331)	80
図版 6	出土遺物 (82~163)	74	図版13	出土遺物 (332~377)	81
図版 7	" (108~220)	75	図版14	" (378~426)	82

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下県文化課）では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るために、各関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（農地整備課・大隅耕地事務所）は、志布志町道重工区における県営畑地帯総合土地改良事業（曾於東部二期地区）の計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、県文化課に照会した。

これを受けて文化課は、昭和61年5月当該地区的埋蔵文化財分布調査を志布志町教育委員会と実施した。

分布調査の結果、当該事業区域内に道重遺跡の存在していることが判明したので、事業実施前に遺跡の範囲・性格などを把握するための確認調査を実施することとなった。

第2節 調査の組織

調査主体者 志布志町教育委員会

調査責任者	"	教 育 長	野 间 隆
調査事務	"	社会教育課長	西坂 弘行(～H1.12)
	"	"	慶田 泰輔(H2.1～)
	タ	参事兼課長補佐	川崎 卓男(～H1.1)
	"	文化体育係長	前田 泰郎
	"	主 事	谷口 隆博
	"	主 事	米元 史郎
	"	主 事	荒 平安次
	"	主 事	杉田 美穂

調査担当者	鹿児島県教育庁文化課	文化財研究員	鶴田 静彦(確認調査)
		主 事	井ノ上秀文(　　)
		主 査	中村 耕治(発掘調査)
		文化財研究員	堂込 秀人(　　)

志布志町教育委員会 主 事 米元 史郎(確認・発掘)

なお、調査企画等において、県教育庁文化課長・吉井浩一、同課長補佐・奥園義則、同主幹・立園多賀生、同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長・吉元正幸、同企画助成係長・京田秀允、同係の各氏の指導・助言を得た。

発掘調査中は志布志町文化財保護審議会委員瀬戸口望氏の助言を得た。

第3節 調査の経過

確認調査は、鹿児島県からの受託事業として、志布志町教育委員会が調査主体者となり、県文化課の協力を得て実施した。

その結果、事業計画地区内に A, B, C, D, E の 5 地区に遺物を出土する地域があることが判明した。

この調査結果は、発掘作業終了直後に県教育庁文化課において関係者立ち合いの上、事業報告書として報告された。これを受けた事業主体の大隅耕地事務所は、実施計画再検討の結果、E 地区（現地保存）を除く 4 地区については設計変更の措置を取り得ず、年度内の緊急発掘調査の実施を要望した。この為志布志町教育委員会は再度県文化課の協力を得て、A, C 地区の発掘調査と D 地区の工事中立ち合い調査を実施することにした。又、B 地区については、幹線舗装道路に当たる部分であったため、平成元年度に発掘調査を実施することとした。

さらに、これらの 3 回にわたる調査の総括的な出土遺物整理作業、並びに報告書作成作業は一括して B 地区の調査終了後に実施することとした。

○確認調査は、昭和 63 年 10 月 12 日から 27 日までの実数 12 日間実施し、また調査期間の制限もあるため地形等を考慮し工事により削平されると思われる部分や、道路に計画されている部分を中心に、2 × 2 m を基本とするトレンチを 24 箇所設定した。その間の調査の経過と概要については、日誌抄をもってかえる。

- 10月12日（水）用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法・調査上の留意点の説明。1, 2, 3, 4 トレンチ設定、掘り下げ。
- 10月13日（木）5, 6, 7 トレンチ設定。1, 2, 3, 4, 5 掘り下げ。
- 10月14日（金）8, 9 トレンチ設定。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9 掘り下げ。1, 2, 3, 4, 5, 14 位置図作成。3, 5 土層断面写真撮影。2, 4, 5 遺物出土状況実測、写真撮影。
- 10月17日（月）10, 11 トレンチ設定。2, 4, 7, 8, 9, 10, 11 掘り下げ。5 土層断面実測。2, 4 遺物出土状況実測、写真撮影。
- 10月18日（火）12, 13, 14, 15, 16 トレンチ設定。4, 10, 11, 12, 13, 14 掘り下げ。
- 10月19日（水）17, 18 トレンチ設定。10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18 掘り下げ。6, 10, 12 位置図作成。6 土層断面写真撮影。6 土層断面実測。4, 10, 12 遺物出土状況実測、写真撮影。
- 10月20日（木）19, 21 トレンチ設定。4, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 21 掘り下げ。7, 14 土層断面写真撮影。3 土層断面実測。4, 14 遺物出土状況写真撮影。3 埋め戻し。
- 10月21日（金）20, 22 トレンチ設定。4, 18, 19, 20, 21, 22 掘り下げ。1, 2, 7, 8, 9, 15, 16 位置図作成。1, 2, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16,

- 17, 19, 20土層断面写真撮影。2, 7, 8, 9, 16土層断面実測。15, 16遺物出土状況写真撮影。5, 9埋め戻し。
- 10月24日（月） 23, 24トレンチ設定。21, 23, 24掘り下げ。13, 17, 24位置図作成。10, 18, 19, 20, 21土層断面写真撮影。1, 13, 15, 16, 17土層断面実測。18, 21遺物出土状況写真撮影。15, 16遺物出土状況実測。1, 2, 6, 7, 8, 15, 16, 17埋め戻し。
- 10月25日（火） 11, 14, 18, 19, 20, 21, 23, 24位置図作成。21, 22, 24土層断面写真撮影。10, 11, 12, 14, 18, 19, 20, 21, 22, 24土層断面実測。23遺物出土状況写真撮影。14, 18, 21遺物出土状況実測。10, 11, 12, 18, 20埋め戻し。
- 10月26日（水） 22位置図作成。23土層断面写真撮影。22, 23土層断面実測。23遺物出土状況実測。4, 13, 14, 19, 21, 22埋め戻し。
- 10月27日（木） 23, 24埋め戻し。用具撤収・搬出・水洗・点検確認後収納。発掘調査を終了。

◎ A地区及びC地区の全面発掘調査は、平成元年11月24日から12月17日までの実数18日間実施した。両地区とも確認調査の成果に基づき、工事により削平される部分について調査した。その間の調査の経過と概要については、日誌抄をもってかえる。

- 11月24日（木） 用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法、調査上の留意点の説明。
↓ 重機（ユンボ）により表土剥ぎを行い跡地をさらえる。表土の下位はV層の
- 11月25日（金） アカホヤがほとんどであるが、部分的にVI層・V層になるところがある。V層上部より縄文時代晚期の遺物が出土し、VI層中より縄文時代早期の遺物が出土する。また表土中より石皿・石ヒ等も出土する。
北側にあるベンチマークを基準にして磁北にあったグリッドを組む。
- 11月28日（月） 重機による表土剥ぎを継続。
↓ G・H・I-5・6区表土下位をさらえる。部分的にVI層V層が出てくるが
- 12月2日（金） 大半はV層で縄文晚期の遺物が出土。I-5・6区では一部シラスが出土する。
G・H・I-3・4区表土剥ぎの跡をさらえる。その後V層上部の縄文晚期の包含層の掘り下げを実施する。縄文晚期の深鉢・浅鉢（黒色研磨土器）・石器（すり石・有肩石斧）等が出土する。
道重遺跡C地区の表土剥ぎを開始。
- 12月5日（月） G・H・I-2・3区V層掘り下げ。斜面のため高い部分はすでにVI層及び
↓ V層になっている。ほぼ全面にVI層まで掘り下げる。縄文晚期の遺物が出土する。H・I-4区6区に1m幅のテストトレンチを設定しVI層の確認を実施する。VI層上面で地形図（25cmコンタ）をとる。
- G-5区掘り下げ。G・H-4区5区1m幅のトレンチを設定する、VI層掘

り下げを実施する。縄文早期の土器出土。

G-4区Ⅵ層掘り下げ。縄文早期の遺物（貝殻文円筒土器・石鏃等）が出土する。

C地区V層掘り下げ。縄文晚期の土器（縦目压痕文土器・黒色研磨土器）石器（石斧片・石鏃）が出土する。南側も遺物包含層があると想定されるためその部分の表土剥ぎを重機で行う。

12月12日（月） G-3区4区5区・H-4区5区6区のⅥ層掘り下げ。縄文早期の遺物が出土する。H-4区において集石検出。実測後下部に掘り込みがないか調査する

12月17日（土）が認められない。

C地区V層掘り下げ。縄文晚期の土器・石鏃・石錐片等が出土する。下層確認トレンチ掘り下げ。Ⅵ層中にて縄文早期の土器（窯ノ神式土器）が出土する。

ただ傾斜地下部においては遺物が見られないため、上部を中心にⅥ層を掘り下げるが遺物の出土は希薄である。

作業終了。用具水洗、点検、確認後収納。

◎C地区（舗装道路部分）の全面発掘調査は平成元年10月2日から24日まで実数15日間実施した。その間の調査の経過と概要については、日誌抄をもってかえる。

10月2日（月） 用具運搬、点検、確認、作業員への調査方法、調査上の留意点の説明。調査
区全域の草払い機による除草作業。

10月6日（金） 山畝による傾斜地の表土剥ぎ。

1, 2トレンチ設定、掘り下げ。

重機（ユンボ）により表土剥ぎを行い跡地をさらえる。表土の下位は調査区域南部では、東側の雜木林（小丘陵）より約14%の自然勾配をもって西側へ落ち込んでいることが確認され、さらに南側ほど火山灰の堆積が薄く、最南部では表土直下で、基盤岩石である日南層群が出土することが確認された。

2トレンチ表土より遺物出土。

調査区南部東半を完掘し、遺物包含層がないことを確認。

調査区南部西半並びに中央部のⅥ層より遺物出土。写真撮影。実測。取り上げ。さらに掘り下げ。

10月11日（水） 調査区北部の掘下げに着手。I層よりⅤ層まで削平を受けており、北端と南端に人为的掘り込み溝のあることが判明。表土層（盛土）より遺物出土。3ト

10月13日（金） レンチ設定掘り下げ。Ⅴ層より細石刃細石核出土。写真撮影。実測。取り上げ。

調査区中央部並びに南部の掘り下げと西側畦畔の法面整形。Ⅳ層より遺物出土。写真撮影。実測。取り上げ。さらに掘り下げ。

10月16日（月） 調査区北部のトレンチを全域拡張掘り下げ。北東より南西方向に傾斜していることを確認。Ⅳ層より遺物出土。写真撮影。実測。取り上げ。さらに掘り下
10月20日（金）げ。

調査区中央部並びに南部の掘り下げ。Ⅳ層より遺物出土。写真撮影。実測。
取り上げ。さらに掘り下げ。

調査区南部西半をⅣ層まで完掘。

北部中央部間の堆積廃土をタイヤショベルで除去作業。

10月23日（月） 調査区中央部並びに南部の掘り下げ。Ⅳ層より遺物出土。写真撮影。実測。
取り上げ。

10月24日（火） 調査区全域の平板測量。
作業終了。用具水洗、点検、確認後収納。

第Ⅱ章 遺跡の位置・環境

本町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥部に位置し、海岸線は東西に約10km、内陸部に向かって約24kmで、南北に細長く延びる釣鐘形の形状をなしている。

北東から東側へは、宮崎県都城市及び串間市と接して県境をなし、北西から西へは、末吉町、松山町、有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで、西側は砂浜海岸が続くのに比べ、東側は日南層群で構成される山稜が海までせまり、岩礁海岸を形成している。尚、市街地は、比高40m程のシラス台地の海食崖下に発達した古期砂丘带上に立地している。これは約6000年前の縄文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、山地と台地、それに河川に沿って小規模に発達した沖積低地に大別出来る。

北部から東部にかけての山稜地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりなる、南那珂山系の西端域となっている。

シラス台地は並行して南流する中小の河川の活発な侵食作用によって、深い谷で分断され、さらにその支流によって、樹枝状に広がる谷頭侵食で細かく刻み込まれており、大小幾多の台地が形成されている。また、谷底の低地とは急傾斜面や崖によって区切られている。

町内を流れる河川は、西側を延長24kmの安楽川が、東側を延長15kmの前川がそれぞれ南流しており、他に北東山間部の四浦地区には串間市より大矢取川が入り込んでいる。またこれらの河川の中流域から下流域にかけては各所に大小の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

このような地形のため、町内に分布する約170箇所の埋蔵文化財遺跡の多くは台地上に立地しているが、内陸山間部では、山稜に付随するそれぞれ独立した小規模な山麓舌状台地基部(谷あいの湧水を利用するタイプ)、あるいはその辺縁部(台地下の河川を利用するタイプ)に立地しており、南部の広域な台地では、水源に遠い台地中央部に遺跡の立地は見られず、これらの辺縁部、もしくは台地に付隨する河岸段丘上に集中している。

道重遺跡は前述安楽川水系と前川水系の分水山稜尾根部の南側斜面に立地しているが、昔はすぐ北裏面に湧水があったということである。

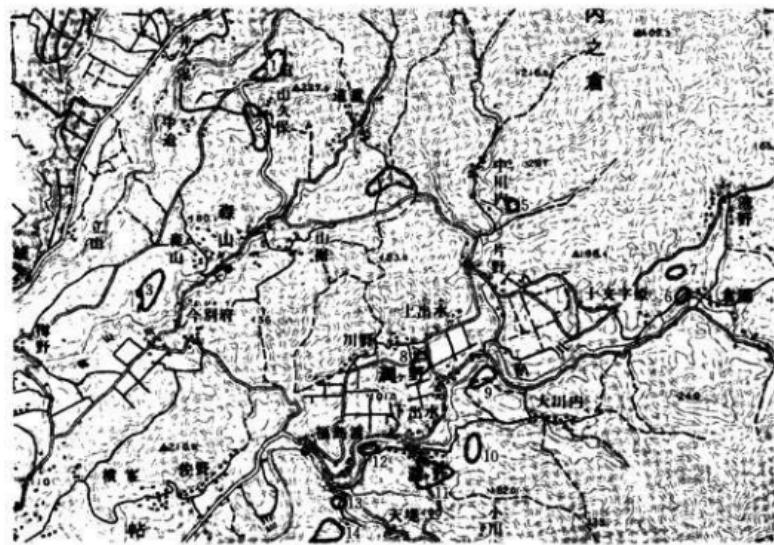
この付近は、「縄文銀座」と言われるほど遺跡の密集地帯で、道重遺跡周辺にも第1図に示す通り多くの遺跡が散在している。

特に、昭和39年発掘調査された片野洞穴遺跡はトレンチ掘りにもかかわらず、多量の獸骨・貝殻とともに縄文時代早期から近世までの各時代の遺物が層位的に出土している。

鎌石橋遺跡は前川中流域の河岸段丘上に立地し、細石核・細石刃をはじめ縄文時代草創期に比定される隆帶文土器や集石炉遺構と縄文前期・晩期の遺物が出土し重要な遺跡となっている。

又、昭和初年に発掘調査が行われた出口A遺跡も、本町では発掘例の少ない低地河岸段丘(水田)上の遺跡であるが、特殊な異形石器(双角尖頭器)が出土している。

倉園B遺跡では縄文早期の土器とともに連穴土括10基や集石遺構60基が出土している。

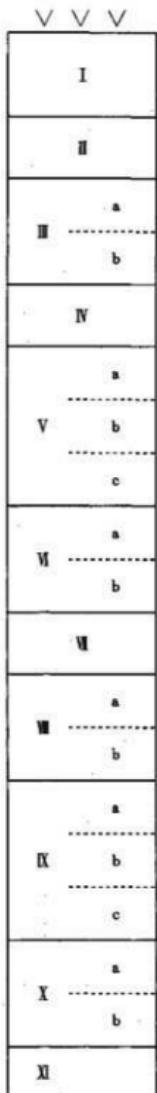


第1図 道重遺跡周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	出土遺物	番号	遺跡名	出土遺物
1	小迫	黒川式、刺突連点文	8	上出水	石板式吉田式住居址
2	山久保 A	阿高式黒川式入佐式	9	土光 A	塞ノ神式轟式春日式
3	平原 B	筵目圧痕文、有肩石斧	10	東原	塞ノ神式曾煙式配石
4	道重	塞ノ神式、黒川式	11	潤ヶ野	轟式岩崎上扇式振縄文
5	片野洞穴	曾煙式西平式彩色石器	12	出口 A	双角石器
6	倉園 A	阿高式指宿式大平式	13	鍊石橋	細石刃細石核隆帶文
7	倉園 B	吉田式前平式連穴土壙	14	鍊石	塞ノ神式黒川式土師器

第Ⅲ章 層位



遺跡の層位は、確認調査と全面調査（A地点、B地点、C地点）においては若干の相違が見られた。また、確認調査においても各トレンチにおいて相違が見られた。

ここでは確認調査、全面調査を含めて調査区全体の標準的な層位について説明する。

I層 褐色の表土。色調や硬さ等により数層に細分される部分がある。

II層 黒褐色腐植土。

III a層 暗黄褐色土。

III b層 黄色褐色土。下部には霧島の御池を噴出源とすると考えられる細かい黄色のバミスを少量混入している。

IV層 暗黄褐色土。下部には池田湖を噴出源とすると考えられる白色の軽石を混入している。

V層 鬼界カルデラを噴出源とすると考えられるアカホヤ火山灰層で、色調等により a, b, c に細分される。a 層は暗黄褐色を呈しており、二次堆積の可能性も考えられる。b 層は黄褐色を呈している。c 層は明黄褐色を呈しており、下部は砂粒状となっている部分もある。

VI層 黒褐色を呈した粘質の硬質土である。下部が茶褐色となる部分もあり、このような場所では a, b に分けた。

VII層 明黄褐色土。硬質である。桜島を噴出源とする薩摩に比定される。

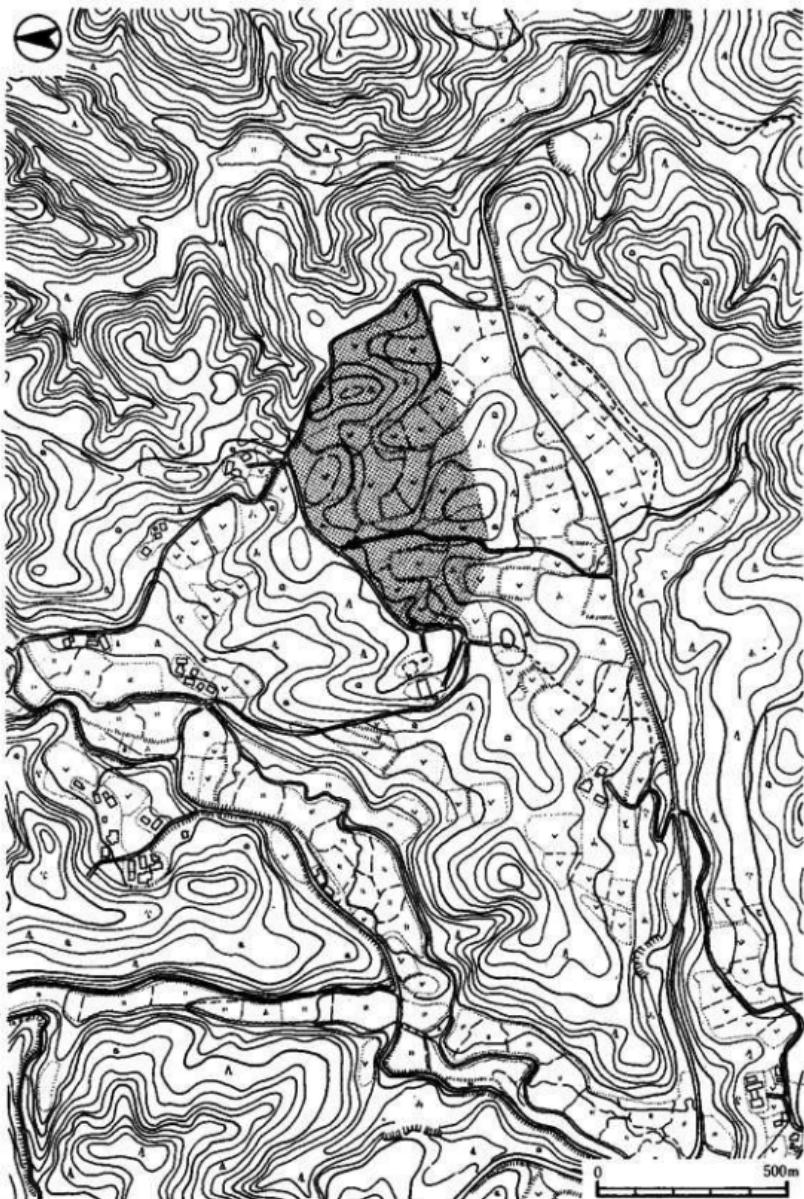
VIII層 茶褐色粘質土。場所によって色調により数層に細分される。

IX層 黄色シラス。場所により色調、硬さ等によって数層に細分される。

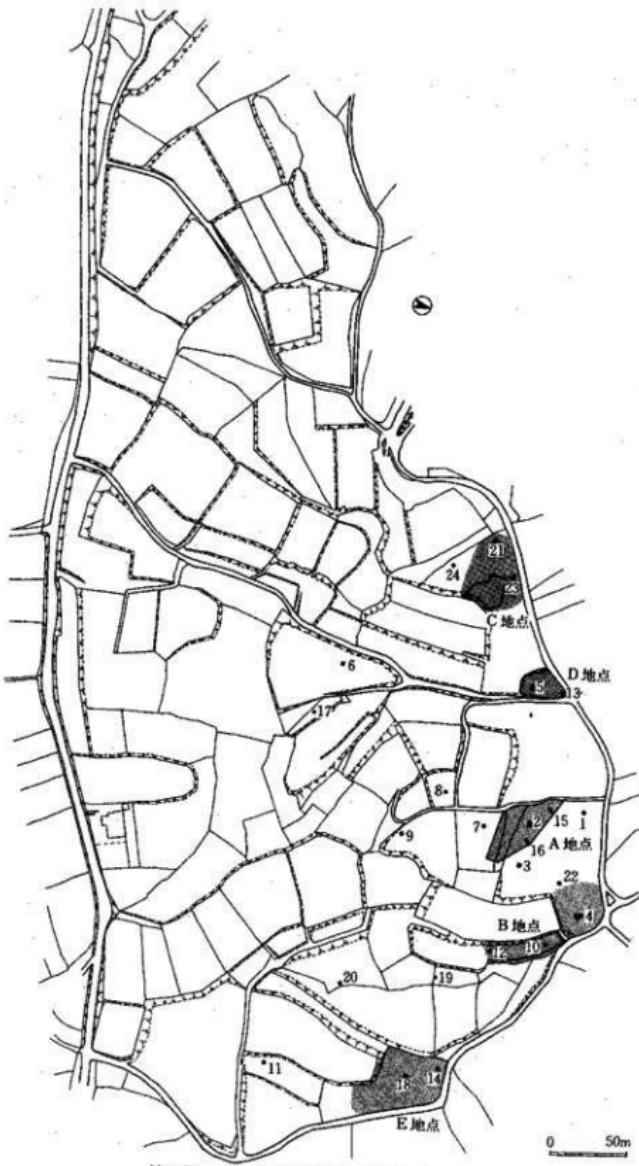
X層 明黄褐色軽石層。大隅降下軽石に比定され、大きさ等によって数層に細分される。

XI層 基盤となる日南層群の未固結砂岩と考えられるものが、風化したものである。

第2図 土層模式柱状図



第3図 調査区と周辺の地形図



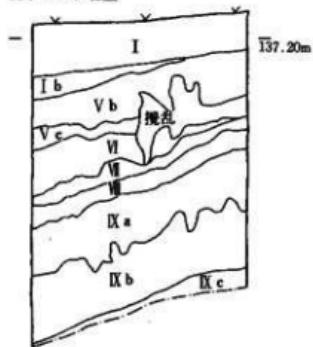
第4図 トレンチ配置図及び各地点位置図

第IV章 確認調査

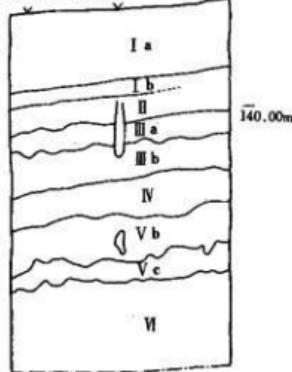
第1節 調査の概要

事業計画区域内には道重遺跡が所在し、遺物が散布していることから、遺跡の範囲、性格等の把握を目的として確認調査を実施した。調査は地形等を考慮して、工事により削平されると考えられる部分や、道路等に計画されている部分を中心にトレンチを設定して実施した。トレンチの大きさは $2 \times 2\text{m}$ の大きさを基本としたが、場所によっては $2 \times 3\text{m}$, $2 \times 4\text{m}$, $1 \times 5\text{m}$ としたものもある。4トレンチでは遺構と考えられるものが確認されたので、拡張して調査を行った。

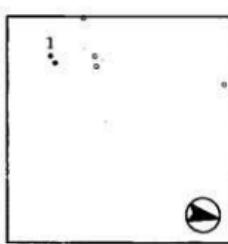
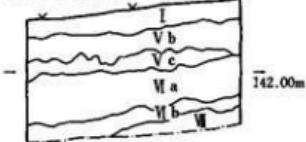
11トレンチ北壁



18トレンチ西壁



14トレンチ西壁



20トレンチ北壁



第5図 11, 18, 14, 20トレンチ

第2節 各トレンチの調査

11トレンチ（第5図）

調査区南東端の傾斜地の畝に $2 \times 2\text{ m}$ の大きさで設定した。層位はほぼ標準土層に近いが、II, III, IV層は確認されなかった。IX層は色調等により a, b, c に細分された。

遺物、遺構等は確認されなかった。

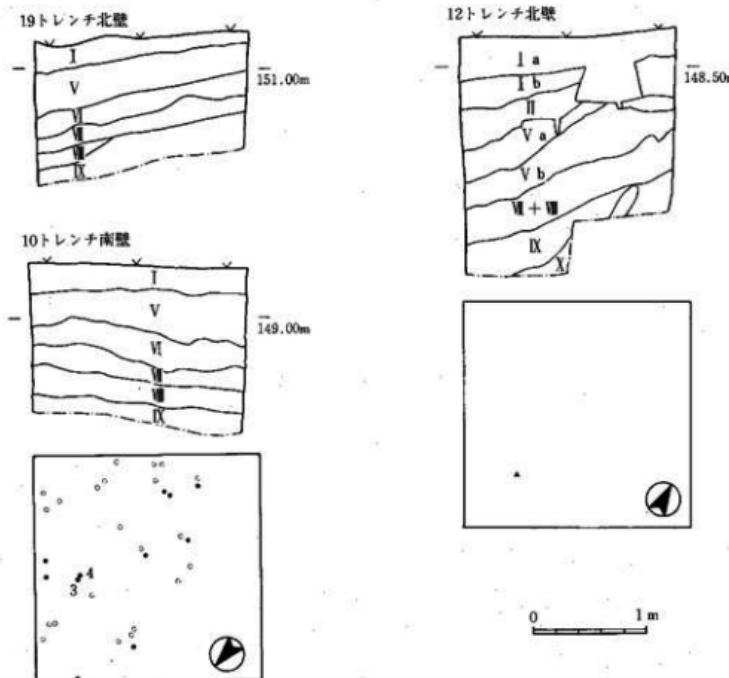
18トレンチ（第5図）

層位はほぼ標準土層のとおりである。VI層の途中までしか掘り下げをおこなわなかった。

遺物はVI層から2点の土器片が数点の疊とともに出土した。第7図1はRの条の結節を2箇所もつLRの縞文を施す土器である。縞文早期の平格式土器と考えられる。

14トレンチ（第5図）

層位はII～IV層は確認されなかったが、ほぼ標準土層のとおりである。VII層まで掘り下げた。VI層がa, bの2層に分けられ、VIa層から1点の土器片と疊が出土した。土器片は小破片の



第6図 19, 12, 10トレンチ

ため固化しなかった。

20. 19トレンチ（第5、6図）

いずれも調査区東部の小丘陵上に設定したトレンチである。20トレンチの層位はI層の下はX層となり、II～X層は見られなかった。

19トレンチはI層の下はV層となり、II～IV層は確認されなかった。

いずれのトレンチからも遺物、遺構等は確認されなかった。

12トレンチ（第6図）

層位はIII、IV層は確認されなかった。現況が畑であるため、地表はほぼ水平であるが、下層はしだいに傾斜が急になっており、旧地形はかなりな傾斜地であったことが想像される。

Va層から第7図2の遺物が1点出土したのみである。ホルンフェルスを素材とする磨製石斧の刃部の破片である。現存の重さは23.8gである。他にI層より数点の土器片が出土している。

10トレンチ（第6図）

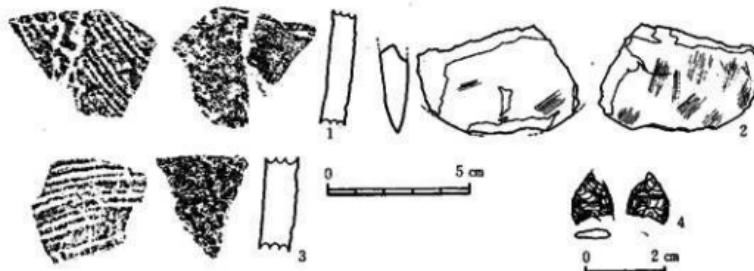
層位はわずかに南西に傾斜している。II～IV層は確認されなかった。耕作等によって削平されたものと考えられる。VII層はやや暗い茶褐色土であり、その中に黄褐色の火山灰が見られる。

VI層から礫とともに遺物が出土している。また、VII層からも数点の小礫が出土している。第7図3は外面に目線条痕文を施すもので、縄文早期のものと考えられる。4は不純物や気泡の少ない良質の黒曜石を素材とした石鐵で、先端部と脚部の一部を欠損している。現存の重さは0.20gである。他にチャートやタンパク石の剥片が数点ずつ出土している。

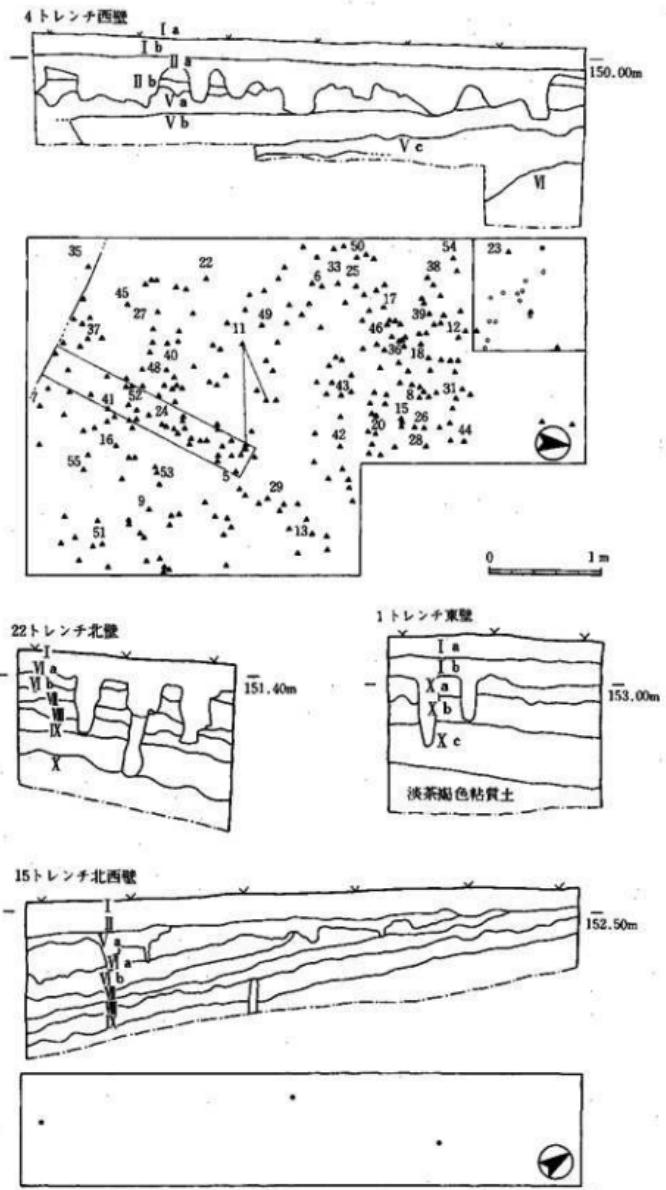
4トレンチ（第8図）

当初、 $2 \times 3\text{ m}$ の大きさのトレンチで調査を行ったが、遺物の出土量が多く、周辺には遺構の存在も予想されたので、遺跡の性格等の把握のため、南側を2m、東側の一部を1m拡張して調査を行った。

層位はI、II層はa、bに分けられ、II b層はやや明るい。Vc層は硬さによって2層に分けられる部分もあるが、全体的なものではなかった。



第7図 8, 12, 10トレンチ出土遺物



第8図 4, 22, 1, 15トレンチ

V b 層まで掘り下げる時点で、トレンチの南側に落ち込みらしきものがみられた。日程等の関係により、小トレンチで確認を行ったが、性格などは明らかにできなかった。住居跡等の可能性も考えられる。

この遺構らしきものが確認されたため、VI層以下についてはトレンチの北側の一部分を掘り下げるのみであったが、VI層から繩文早期のものと考えられる土器片1点と疊が出土した。

V a, V b 層からは多数の遺物が出土した。第9, 10, 11図31~34は深鉢形土器である。第9図5~9は内窓あるいは直口する口縁部である。5, 6は数条の沈線を施し、8, 9はわずかに肥厚する。5は内外面ともに研磨されている。10~24は外反する口縁部である。10~15は口縁部を肥厚させ、口縁帶としている。他は小破片のためこの口縁帶を持つかどうかは明らかでない。11の外面はヘラミガキによる整形である。13は胎土に金雲母を混入する。10は外面にススの付着が見られる。25~32は胸部の破片である。いずれも外面はヘラナデによる整形であり、内面は25以外は剥落が著しい。25~28, 31は外面に、32は内面にススが付着する。35~46は浅鉢形土器である。35は直線状に外反する口縁部が端部で立ち上がる。36~40は直線状に外反する口縁部である。38~40は山形の口縁であり、頂部から2条単位の沈線弧文を施し、その下位に横位の沈線文を施すと思われる。41は口縁部が短く外反し、内面に1条の沈線を施す。40, 41, 45以外は黒色あるいは淡褐色に研磨されており、胎土も精製されたものである。47~53は底部に組織痕を持つものである。54は小破片のためはっきりしないが、壺の可能性が考えられるものである。

55は頁岩を素材とする打製石斧である。56, 57は頁岩を素材とする磨製石斧であり、I層からの出土である。現存の重量はそれぞれ95.5g, 60g, 62.5gである。

22. I トレンチ（第8図）

22トレンチはI層の下はVI a層となり、以下は標準土層のとおりである。IトレンチではI層の下はX層となり、3層に分けられた。その下に淡茶褐色を呈した粘質土が見られた。

いずれのトレンチでも遺物、遺構等は確認されなかった。

15, 16トレンチ（第8, 13図）

2トレンチで遺物が出土したので、その範囲を確認するためにこれらのトレンチ設定した。

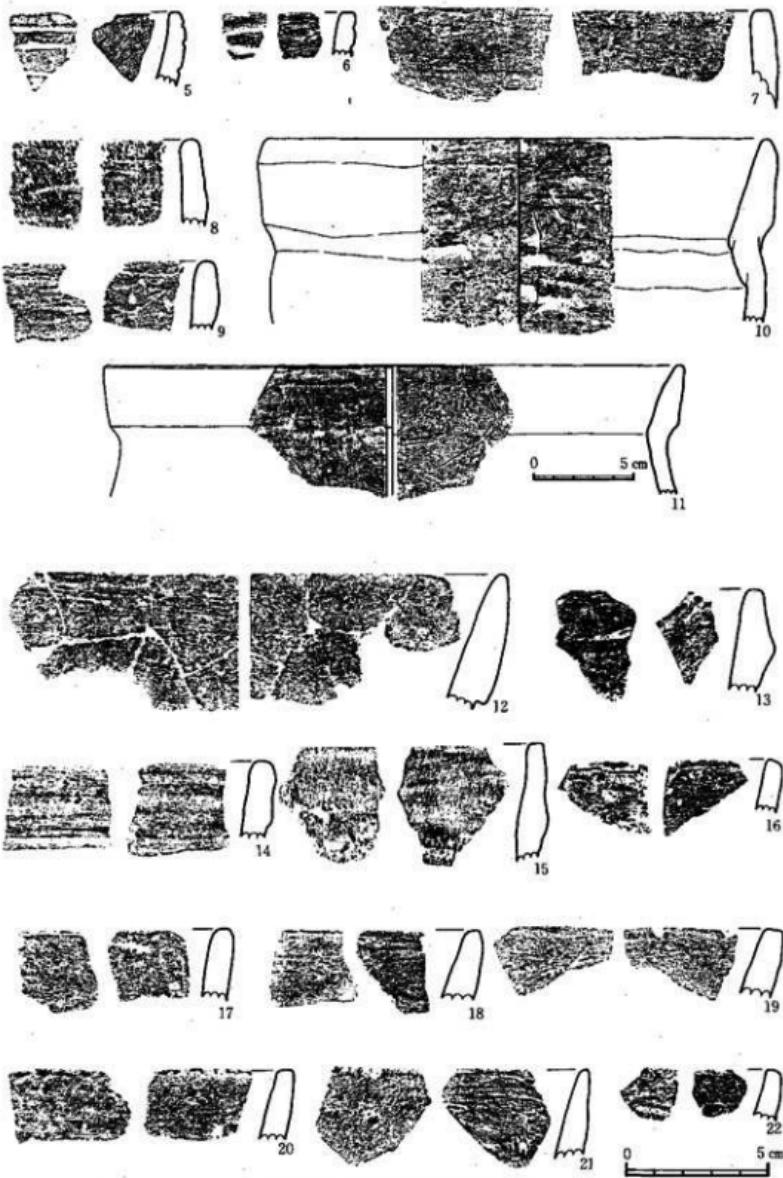
いずれも層位は南側へ傾斜しており、15トレンチではI層の下はVI層となる部分もある。16トレンチではI層の下はV層あるいはVI b層となる。

遺物はそれぞれ3点ずつ出土している。第15図58は15トレンチから出土したもので、貝殻条痕を施す早期の円筒土器である。他は細片のため固化しなかった。

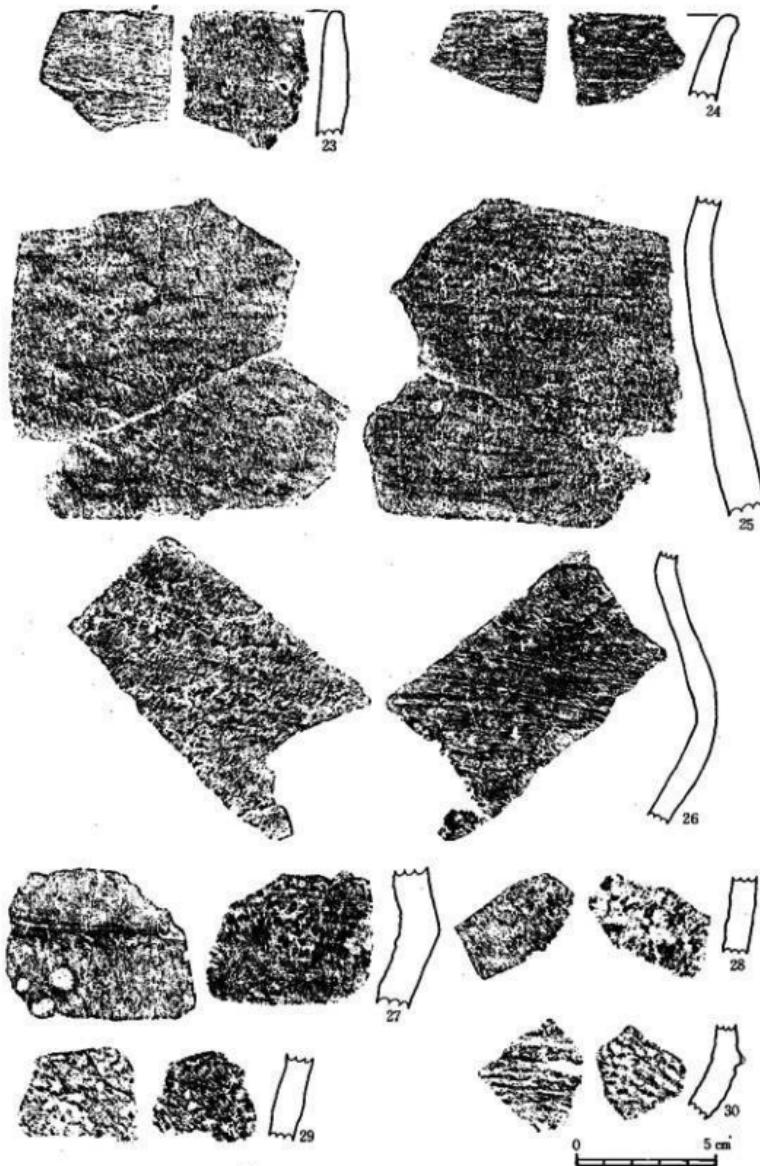
2トレンチ（第13図）

層位はII層の下はV a層となり、以下は標準土層のとおりである。トレンチの中央付近に一部擾乱が見られる。

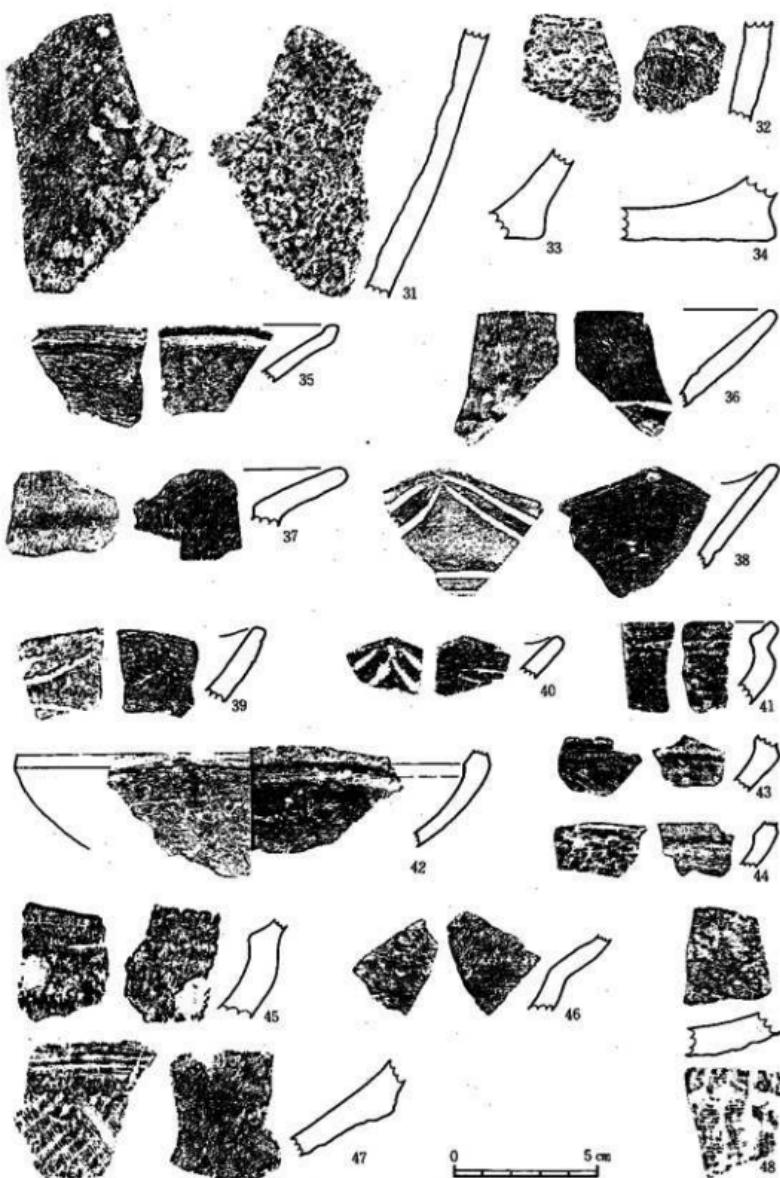
遺物はV a及びVI b層から出土した。第11図59は大きく外反する口縁部で山形となるものである。外面にはススが付着する。60, 61は貝殻条痕文土器の胸部である。61~65は貝殻条痕文



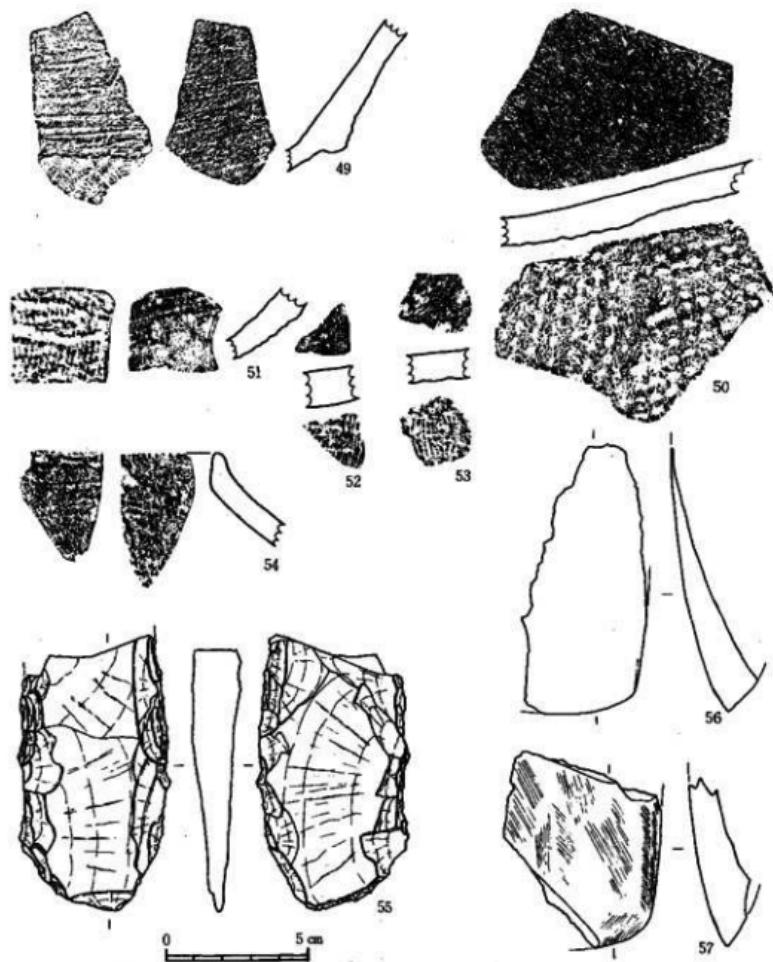
第9図 4トレンチ出土遺物(1)



第10図 4 トレンチ出土遺物(2)



第11図 4 トレンチ出土遺物(3)



第12図 4トレンチ出土遺物(4)

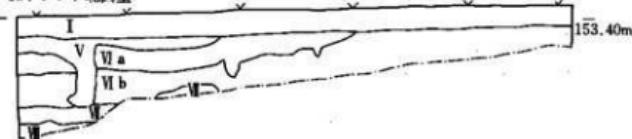
土器の底部である。59は晩期、60～65は早期の円筒形土器と考えられる。66はチャートを素材とするスクレイバーで重さは20.97gである。59、66はV a層、他はVI b層からの出土である。

3トレンチ（第13図）

層位はI層の下はV a層となり、X層の下には淡茶褐色の粘質土が見られる。

遺物、遺構等は確認されなかった。

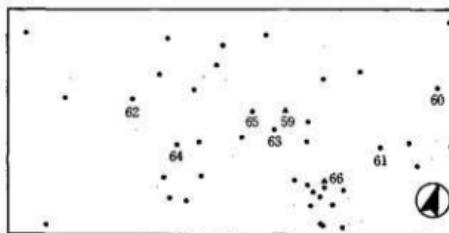
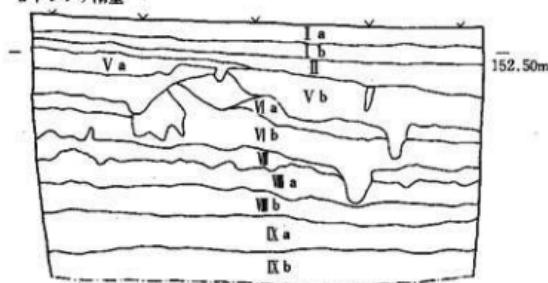
16トレンチ北西壁



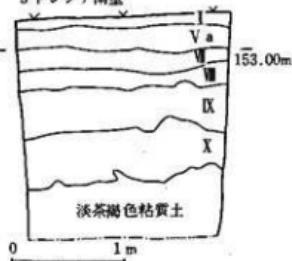
58



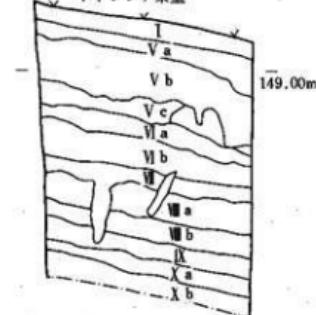
2トレンチ南壁



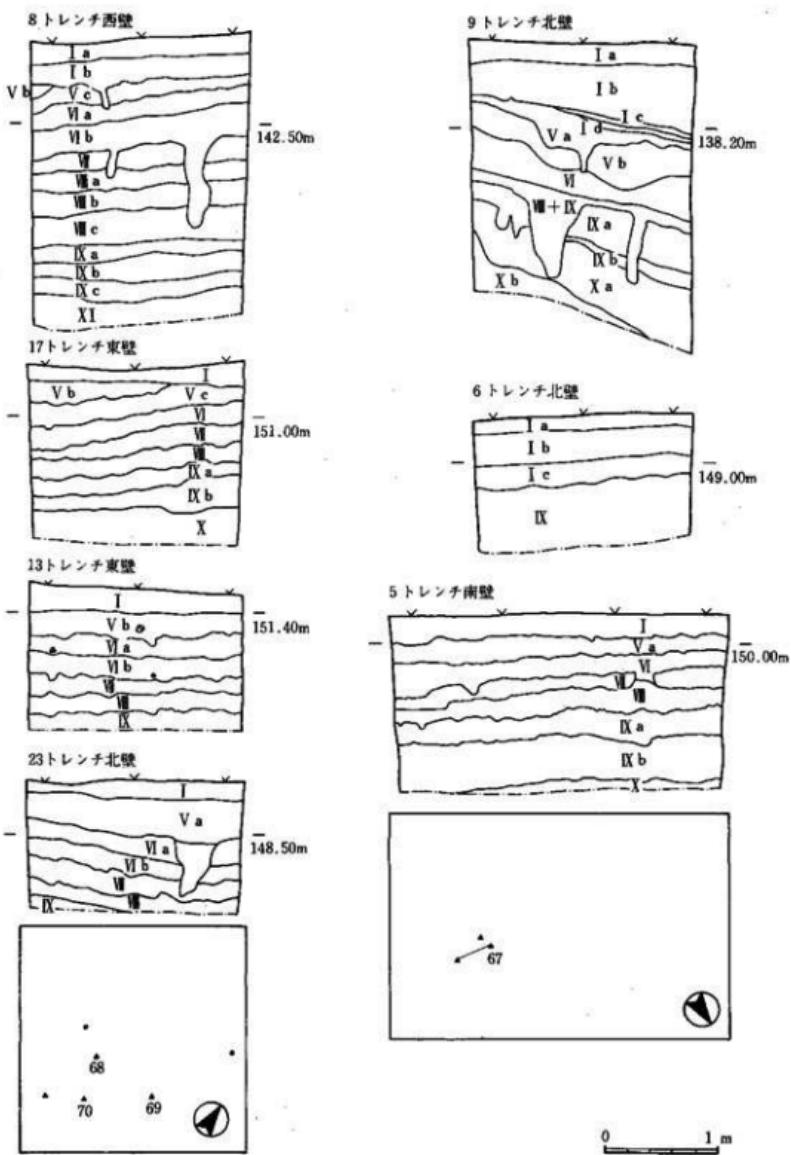
3トレンチ南壁



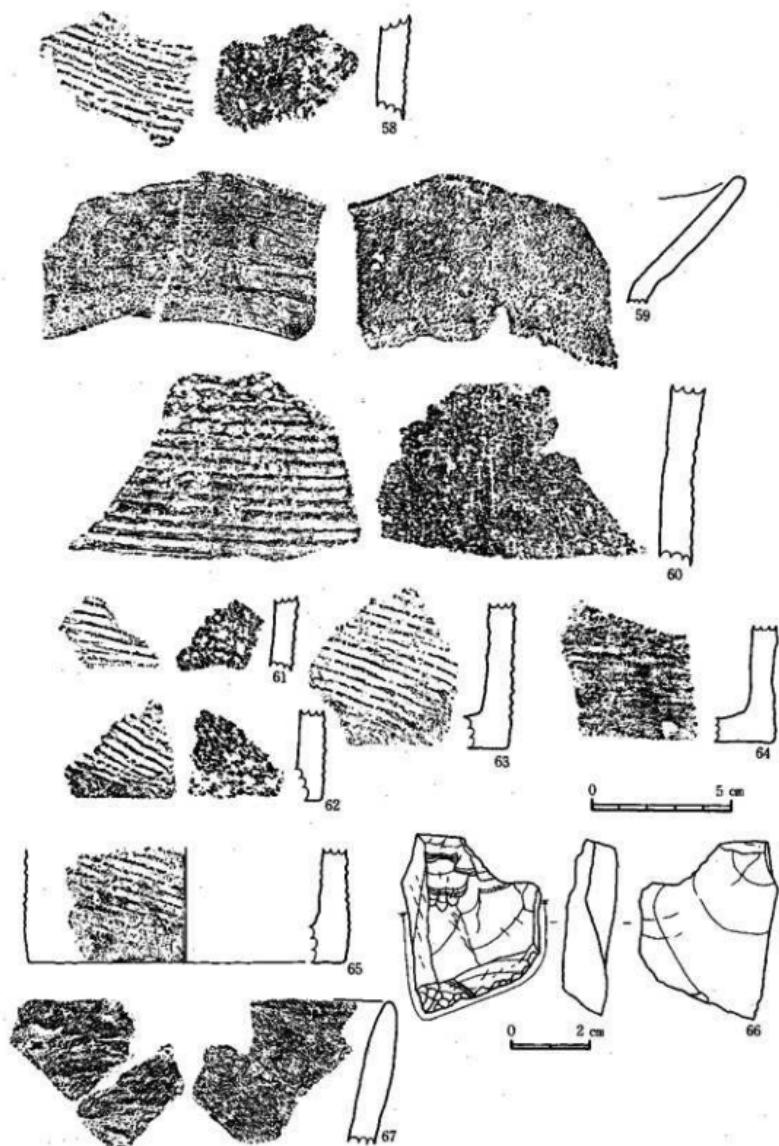
7トレンチ東壁



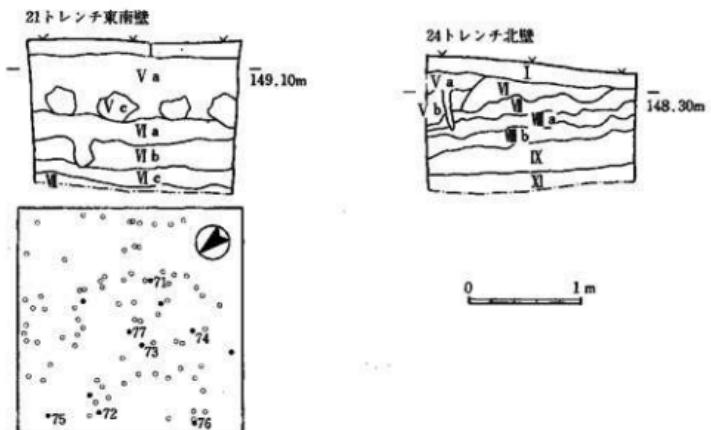
第13図 16, 2, 3, 7トレンチ



第14図 8, 9, 17, 6, 13, 5, 23トレンチ



第15図 16, 2, 5 トレンチ出土遺物



第16図 21, 24トレンチ

7, 8, 9トレンチ (第13, 14図)

7トレンチの層位はI層の下はV層となり、以下は標準土層のとおりである。8トレンチの層位はI層の下はV層となる。VI, IX層は3層に細分された。X層は確認されなかった。9トレンチは傾斜面に設定したため、層に若干の乱れが見られ、樹根等による擾乱も観察される。

いずれのトレンチからも遺物、遺構等は確認されなかった。

17, 6トレンチ (第14図)

17トレンチの層位はI層の下はVb層となり、以下は標準土層のとおりである。6トレンチの層位はI層が3層に分けられ、Ic層の下はXI層となる。

いずれのトレンチからも遺物、遺構等は確認されなかった。

13, 5トレンチ (第14図)

13トレンチの層位はI層の下はVb層となり、以下は標準土層のとおりである。IX層まで掘り下げた。5トレンチの層位はI層の下はVa層となる。以下は標準土層のとおりである。

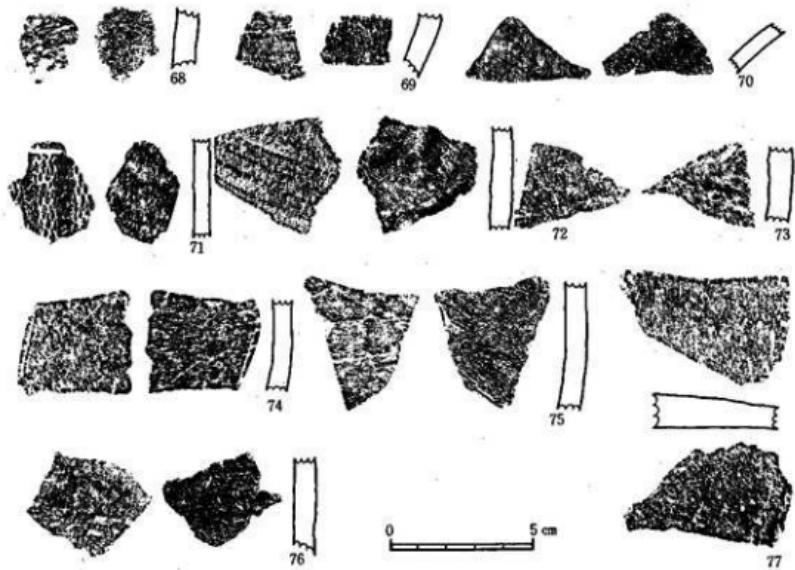
13トレンチからは遺物、遺構等は確認されなかったが、V, VI層から少量の礫が出土している。第15図67は5トレンチのVa層から出土したものである。ややあらく研磨された土器で、晩期の深鉢と考えられるものである。外面にはススの付着が認められる。

23トレンチ (第14図)

層位はI層の下はVa層となる。以下は標準土層のとおりである。IX層まで掘り下げた。

遺物はVa, VIb層から出土した。第17図68, 69は晩期の深鉢形土器の胴部、70は黒色研磨土器の浅鉢形土器と考えられるものである。

21トレンチ (第16図)



第17図 23, 21トレンチ出土遺物

層位はI層の下はV層となり、VI層は色調により3層に分けられた。上から茶褐色、暗茶褐色、黒褐色である。VII層まで掘り下げた。

遺物はVI層から多くの縛とともに、出土した。第17図71は縛位に網目状撚糸文を施した後横位の沈線文を施したものである。原体はRの条を用い、右巻きと左巻きが交差するたびに交互に上下するように巻いていると考えられる。72はわずかに条痕が見られる。73~76は無文の副部破片である。77は底部と考えられる。

24トレンチ（第16図）

層位はI層の下はV層またはVI層である。以下は標準土層に近いがX層は確認されなかった。

遺物、遺構は確認されなかった。

第3節 まとめ

遺物の出土したトレンチについては、便宜上次のように各地点に分けた。2, 15トレンチ周辺をA地点、4, 10, 12トレンチ周辺をB地点、21, 23トレンチ周辺をC地点、13, 5トレンチ周辺をD地点、18, 14トレンチ周辺をE地点とした。遺物の出土した地点については大隅耕地事務所と協議の結果、A, C地点の削平部分については昭和63年度に発掘調査を実施し、他の部分については現状保存を行う。同時にE地点については工事中に立ち会いを行う。B地点の10, 12トレンチ周辺については、平成元年度に発掘調査を実施する。E地点及びB地点の4トレンチ周辺については設計変更により、現状保存を行うこととなった。



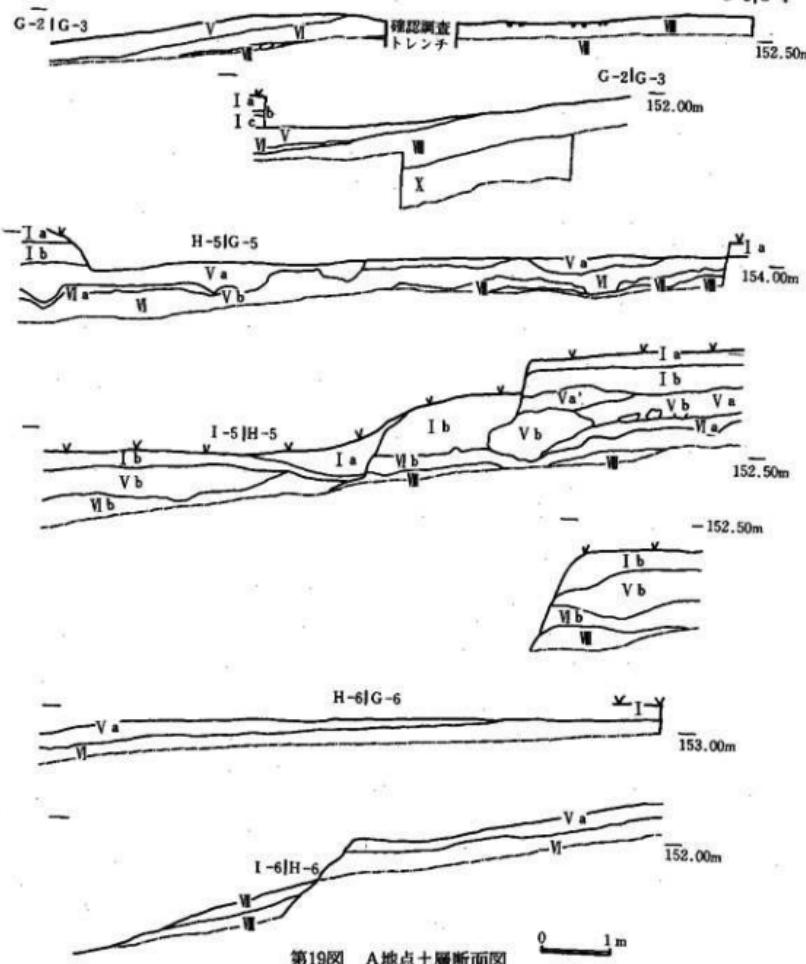
第18図 施工計画図

第V章 A地点の調査

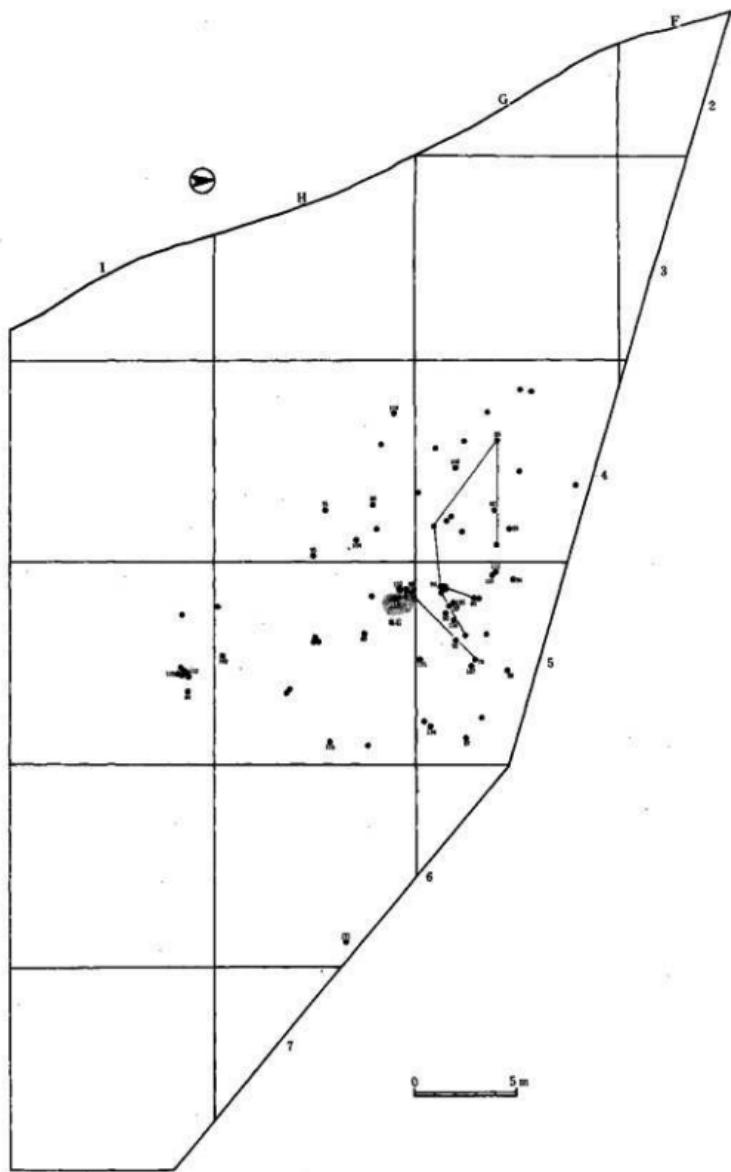
第1節 調査の概要

確認調査によって遺物の出土すると想定される部分に、 $10 \times 10\text{m}$ のグリッドを設定して調査を行った。グリッドは仮基準杭を中心として、南北方向を主軸に A、B、C……とし、東西方

G-3|G-4



第19図 A地点土層断面図



第20図 VI層遺物出土状況

向を1、2、3……とした。

遺物はV層から縄文晚期の遺物が出土し、VI層から縄文早期の遺物が出土した。遺構はVI層から集石が一基検出された。

第2節 層位

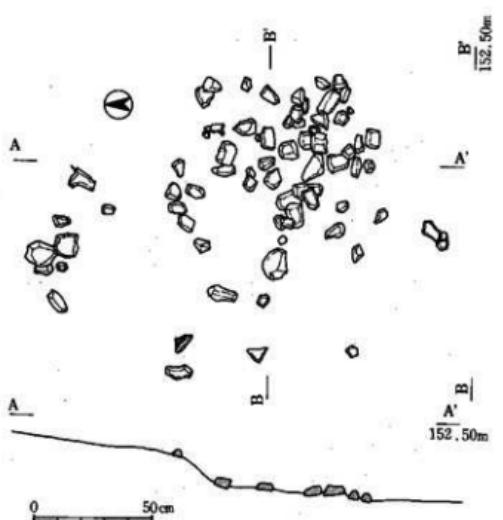
層位はほぼ標準土層のとおりであるが、若干の違いが見られた。I層は色調等の違いにより3層に分けられる部分がある。II、III、IV層は確認されなかった。V層はa、bのみでVc層は確認されなかった。Va層としたのは、Vb層よりわずかに色調が濃い部分である。Vb層は部分的に観察される。VII層も部分的に見られるのみである。

第3節 VI層の調査

1 遺構

遺構は集石が1基確認された(第21図)。H-5区に位置している。径約170×120cmの大きさのほぼ梢円形のプランであるが、南東部にややまとまっている。ほとんどが角礫であり、礫の大きさは10cm前後のものが多いが、中には15cm以上のものや、5cm未満の大きさのものも含まれている。礫はほとんどが安山岩であるが、中には砂岩も少量混ざっている。火を受けたものと考えられ、若干赤味をおびているものがある。礫はそれぞれ高低差があるが、明確な掘り込み等は確認できなかった。

2 遺物



第21図 集石

土器

第22図78~23図96は貝殻条痕文をもつ土器である。78は口縁部は貝殻腹縁を斜位に押圧し、平坦な口唇部には浅い刻みを施す。79は復元口径10.9cmを測る。斜位の押圧文の上下に横位の押圧文を施す。口唇部は細くなり、丸みをおびるが、剥落が著しく文様等ははっきりしない。80は復元口径9.5cmを測る。口縁部は横位に貝殻腹縁を押圧する。82~93は胴部である。いずれも貝殻条痕文を施文するが、82は他に比べて条痕が細い。94~96は底部である。

95ははっきりしないが94、96は底面近くまで条痕文を施す。内面の調整は85～88はケズリで、他はナデ仕上げである。85～88、94、96は同一個体の可能性が考えられる。縄文早期の石板式土器系の土器と考えられるものである。

第23図97～102は押引文をもつ土器である。97は胴部の文様がはっきりしないが、一応この類として扱った。口唇部はやや幅広の刻みを施す。口縁部は斜位の連点に近い押引文を施し、その下位に刺突文を施すものである。98は口唇部に不規則な刻みを施す。口縁部は貝殻腹縁による横位の押圧文を2条施文し、その下位に貝殻腹縁による三角形の押圧文を上下交互に施文する。胴部は貝殻腹縁により、刺突文に近い押引文を施文する。99は平坦な口唇部に刻みを施し、口縁部は貝殻腹縁による横位の刺突文を一条施し、その下位に貝殻の助2つを1単位とする縱位の刺突文を上下2条施文する。胴部は貝殻腹縁による押引文を施文する。100は平坦な口唇部に刻みを施し、口縁部から押引文を施文するものである。101、102は押引文を施文する胴部である。縄文早期の吉田式土器、もしくはその系統の土器と考えられるものである。

第24図103～109は、口縁部が大きく外反し、頸部に沈線文を施文するものである。104、105は口唇部に刻みを施す。103は剥落が著しく、はっきりしない。109は大きく外反する口縁部に沈線文を施す。109は網目状の撚糸文を施すが、条の撚りははっきりしない。縄文早期の塞ノ神式土器と考えられるものである。

石器（第24図 110～116）

110は姫島産と考えられる黒曜石を素材とした石鏃である。重さは0.78gである。111は細身の木葉形の尖頭器である。両面に入念な加工を施し、細身に仕上げている。素材は濁灰青色で、ガラス光沢はにぶい黒曜石である。現在のところ、このような黒曜石は県内には確認されていない。長さ5.92cm、幅1.29cm、厚さ0.47cm、重さ3.34gである。112～116は磨石、敲石である。素材はいずれも砂岩であるが、112～114は円礫、115、116は角礫である。重さはそれぞれ1.005g、1.225g、310g、270g、260gである。

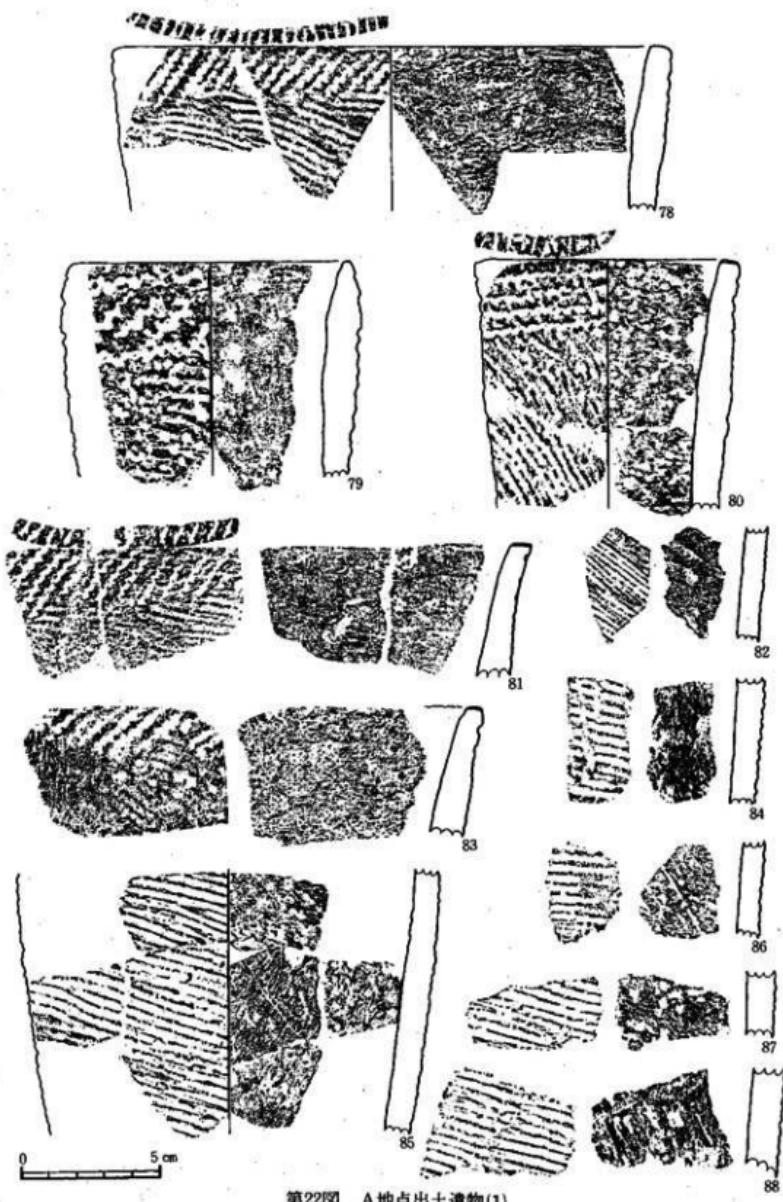
第4節 V層の調査

V層は鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰層である。a、b 2層に分けられたが、b層は部分的に確認されたのみである。V a層は二次堆積の可能性も考えられ、若干腐植の進んだ層である。V a'としたものはV a層より腐植が進み、色調の濃いものである。

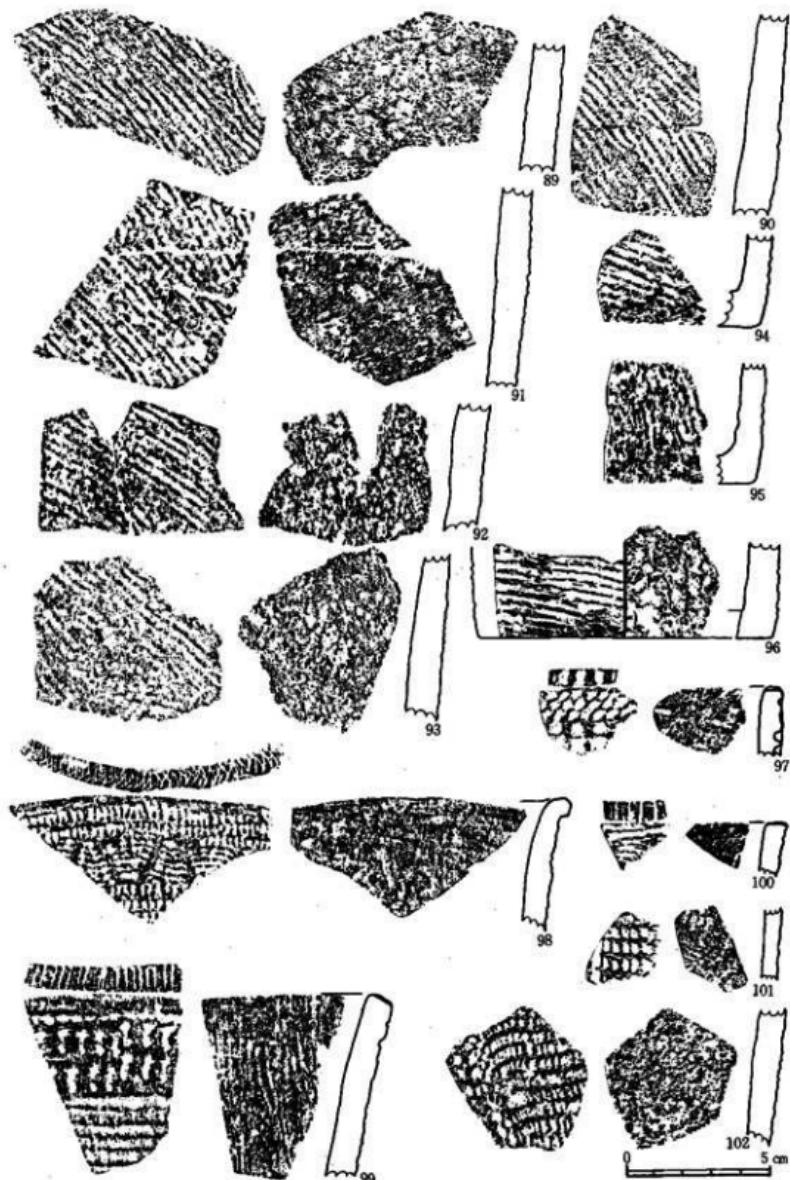
遺物は縄文晚期のものと考えられる深鉢形土器、浅鉢形土器や石器等が出土した。

深鉢形土器（第26～30図）

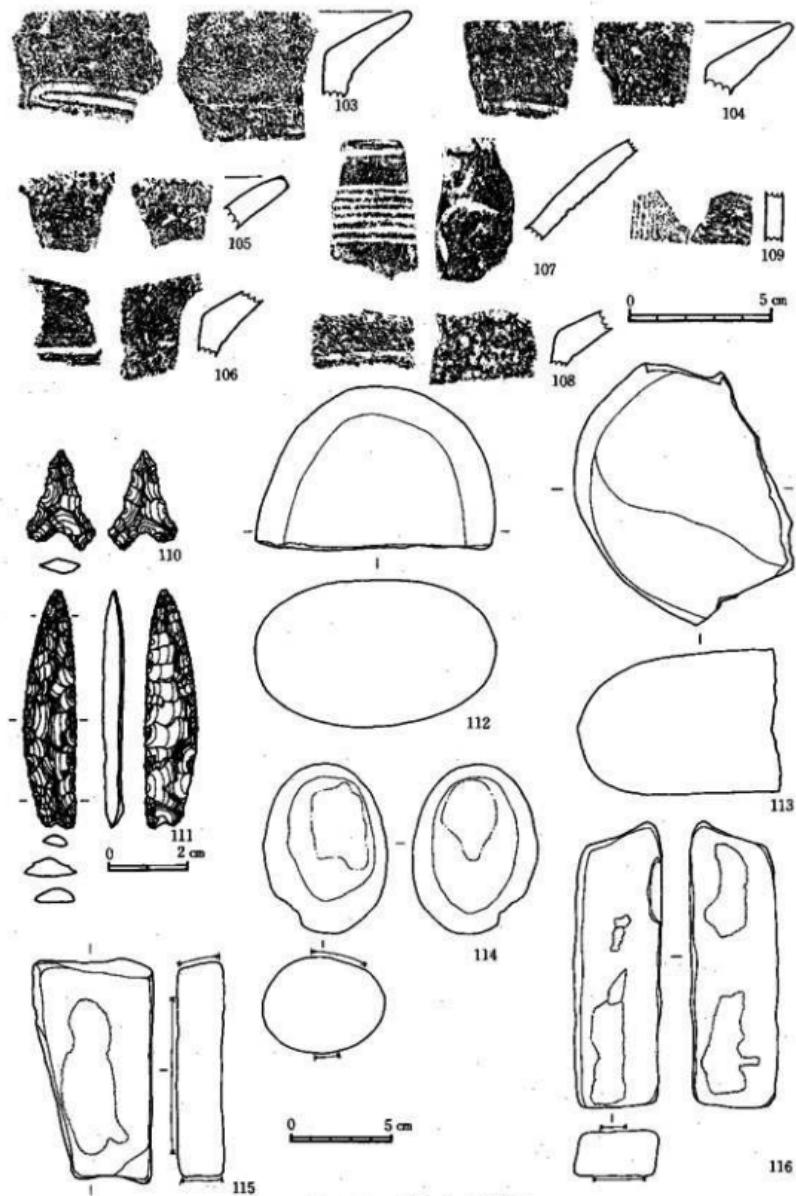
小破片が多く全体の器形等を把握できるものが少なかった。従って口縁部の形態等を中心に説明していく。117～126は口縁部が内湾あるいは直口するものである。117～123は口縁部が肥厚し、口縁帶となる。117、119、124は口縁部に条痕を施文する。118は胴部から大きく外反しながら内傾する口縁部となり、口縁部外面には沈線を施すものと考えられる。117～119は内面の整形はナデ、120は内外面ともに淡黄褐色の研磨である。121～126は内外面ともにナデ整形である。122、123は胎土に金雲母を混入する。127～151は口縁部が外反する



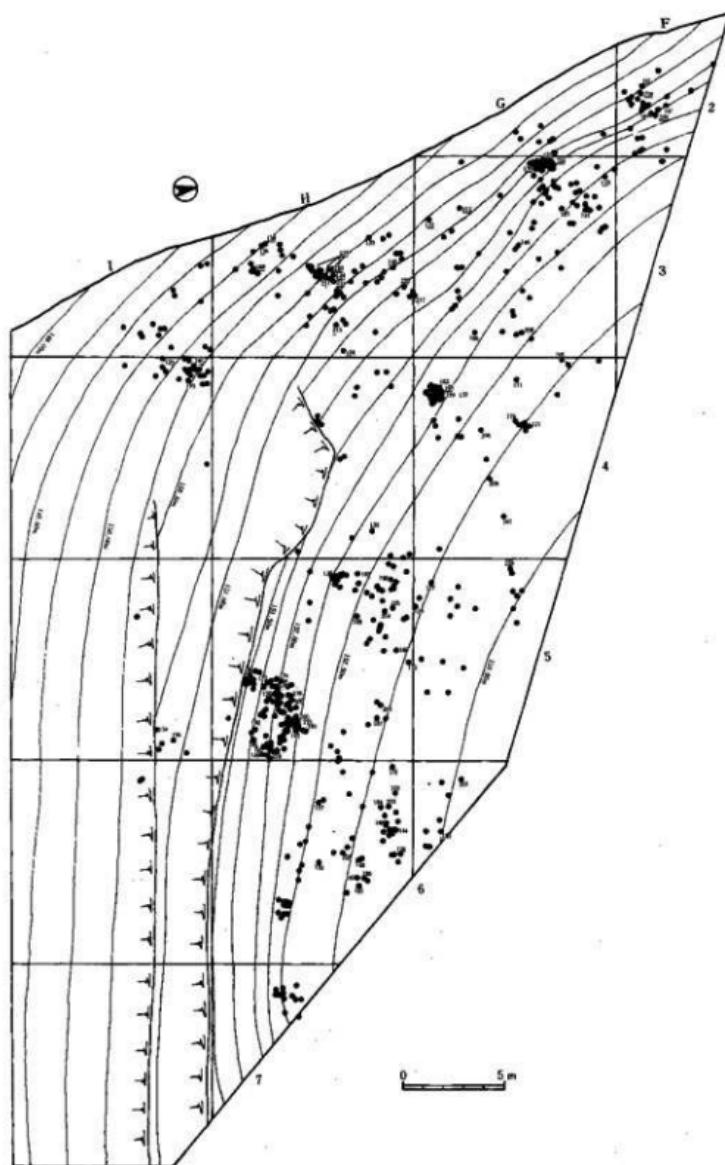
第22图 A地点出土遗物(1)



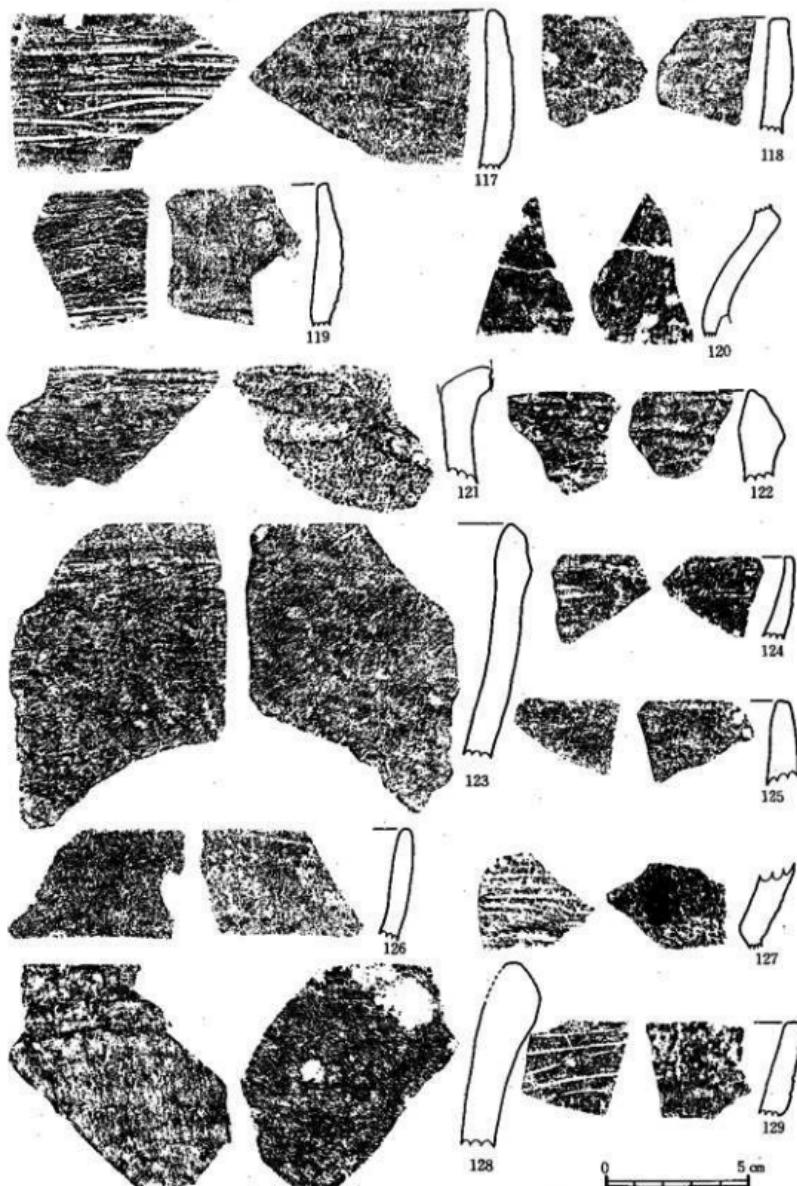
第23図 A地点出土遺物(2)



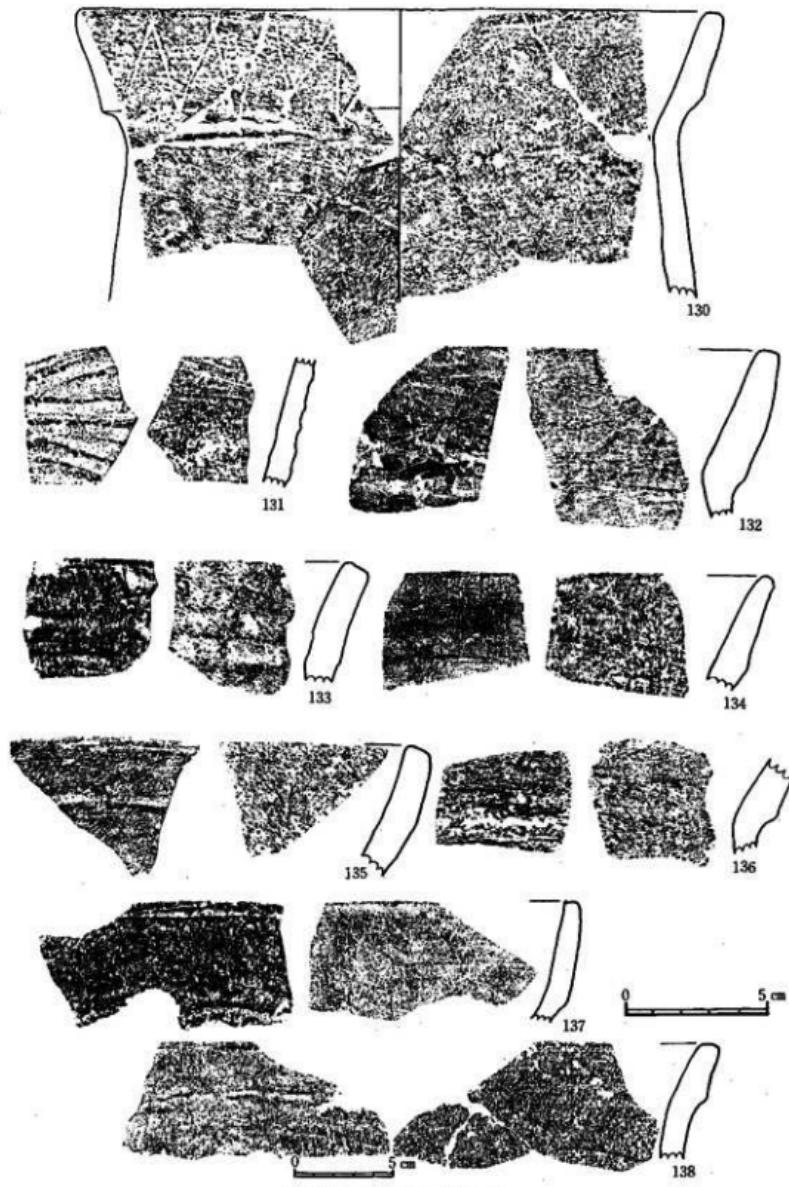
第24図 A地点出土遺物(3)



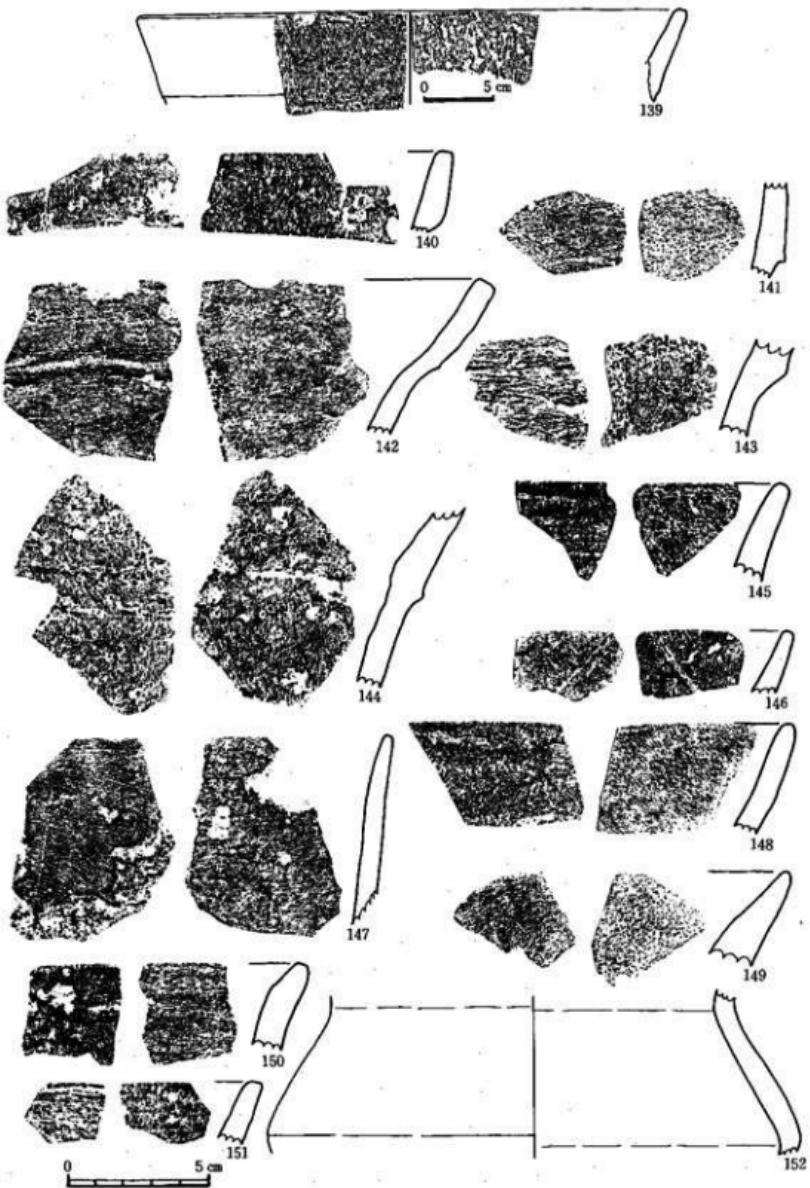
第25図 V層遺物出土状況、V層最下面地形図



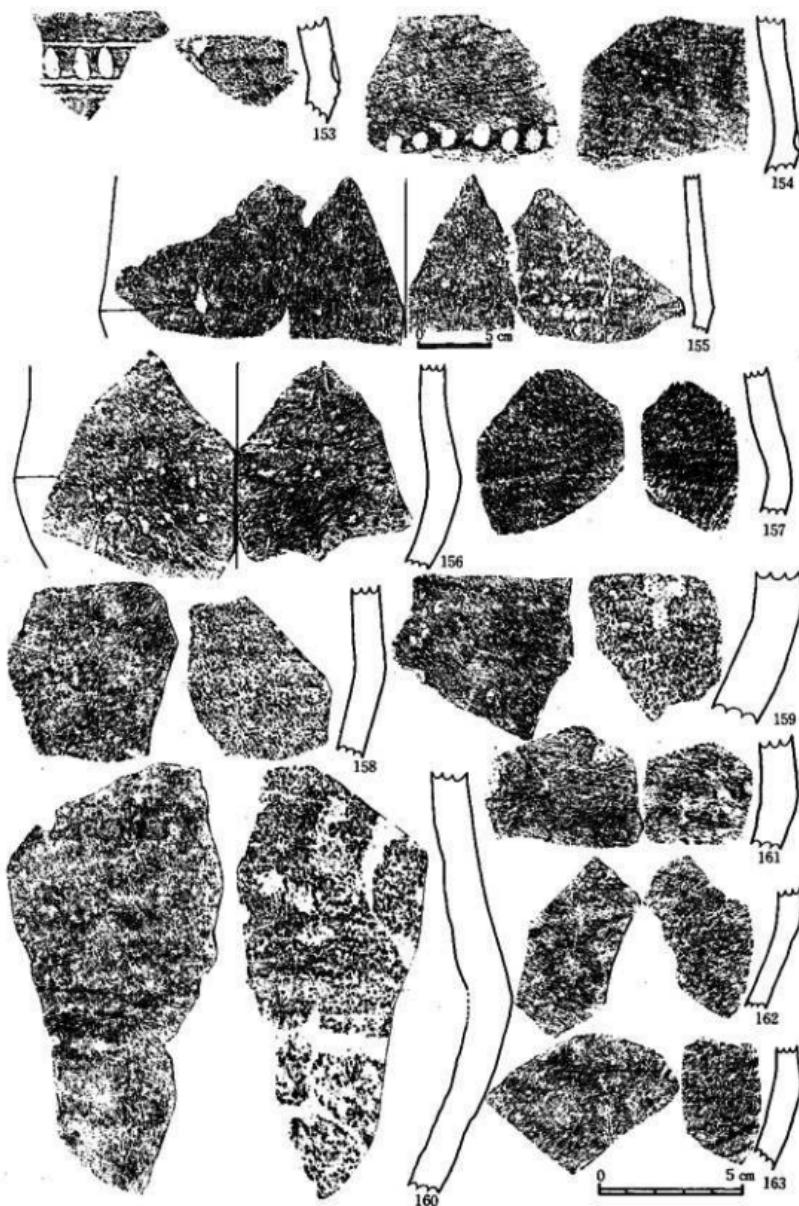
第26図 A地点出土遺物(4)



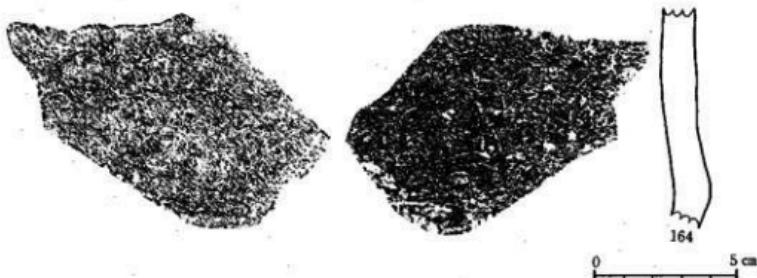
第27図 A地点出土遺物(5)



第28図 A地点出土遺物(6)



第29図 A地点出土遺物(7)



第30図 A地点出土遺物(8)

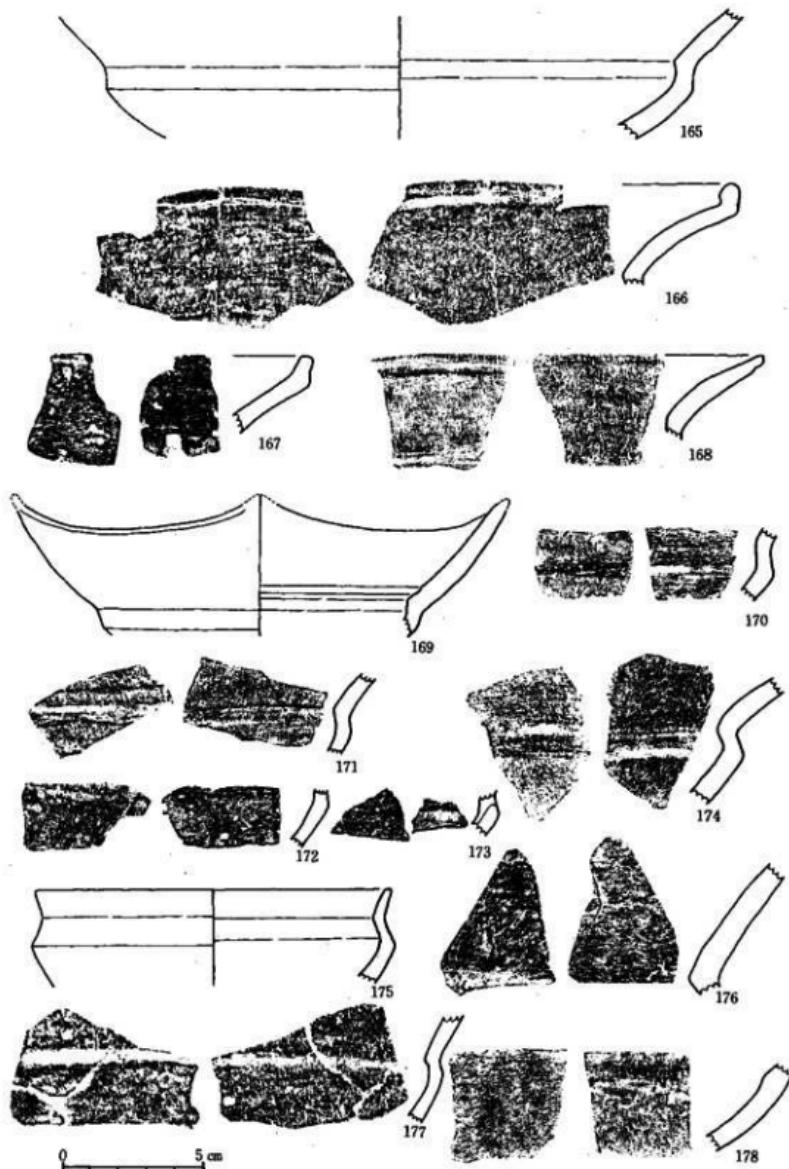
ものである。127～144は口縁部を肥厚させ、口縁帯としている。127、130、132、136は頸部で「く」字状に屈曲し、内面に稜をもつ。127は条痕文、129は横位の沈線文、130は鋸歯状の沈線文、133は凹線文に近い沈線文を口縁帯に施す。整形は128、142は外面は研磨、内面はナデである。132、133は内外面ともに研磨、他は外面ともにナデ仕上げを行っている。136は胎土に金雲母を混入している。121、123、128～130は外面にスヌの付着が認められる。152～164は胴部の破片である。152は胴部が大きく張り、頸部でしまり、外反する口縁部になると考えられる。外面はミガキ、内面はナデ仕上げである。153は胴部の屈曲部の上位に上下それぞれ2条の沈線を施し、その間に長円形の連点文を施すが、上の沈線の間隔が広い。内外面ともにナデ整形である。154は胴部の屈曲部に連点文を施す。外面はミガキ、内面はナデ仕上げである。155～164は胴部の屈曲部分である。160、163は外面はミガキ、内面はナデ仕上げであり、他は内外面ともナデ仕上げである。152、155～158、160、163、164は外面にスヌの付着が認められる。

浅鉢形土器（第31、32図 179）

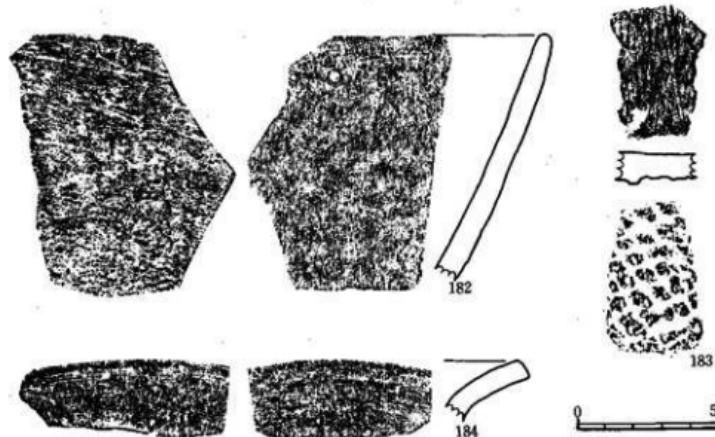
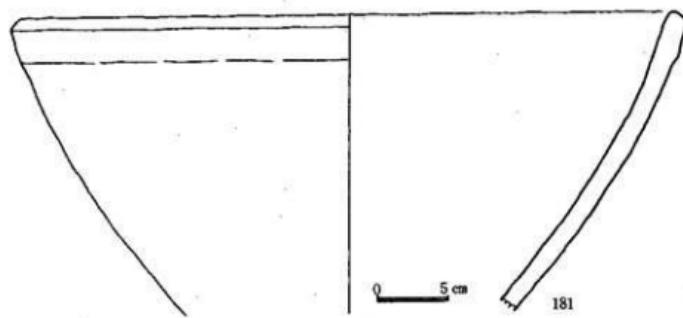
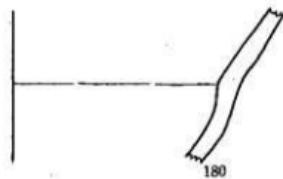
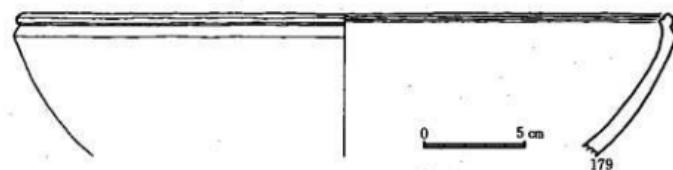
165は胴部がわずかに張り、頸部内面に稜を持ち、直線的に外反する口縁部へと続くものである。166は頸部内面に稜を持ち、大きく外反する口縁部は端部で垂直に立ち上がり、口縁端部は丸みをおびる。口縁部外面は細い一条の沈線が巡る。167は大きく外反する口縁端部が垂直に近く立ち上がる。口縁端部は平坦に仕上げ、外面に浅い沈線が一条巡る。168は大きく外反する口縁部で、端部は立ち上がりではなくやや丸く仕上げ、外面には浅い沈線が1条巡るものである。169は頸部内面に稜を持ち、この稜の上位に沈線を一条巡らす。口縁部は山形になる。175は胴部及び頸部で稜を持ち屈曲し、直線状にわずかに外反する口縁部となるものである。179は肩部と頸部で稜をなして屈曲し、椀状の胴部につらなる。とくに頸部内面は張り出しげみに稜をなし、この稜の上位の口縁部内面に一条の沈線を巡らす。175以外は内外面ともに褐色あるいは黄褐色に研磨された土器である。

鉢形土器（第32図 180～183）

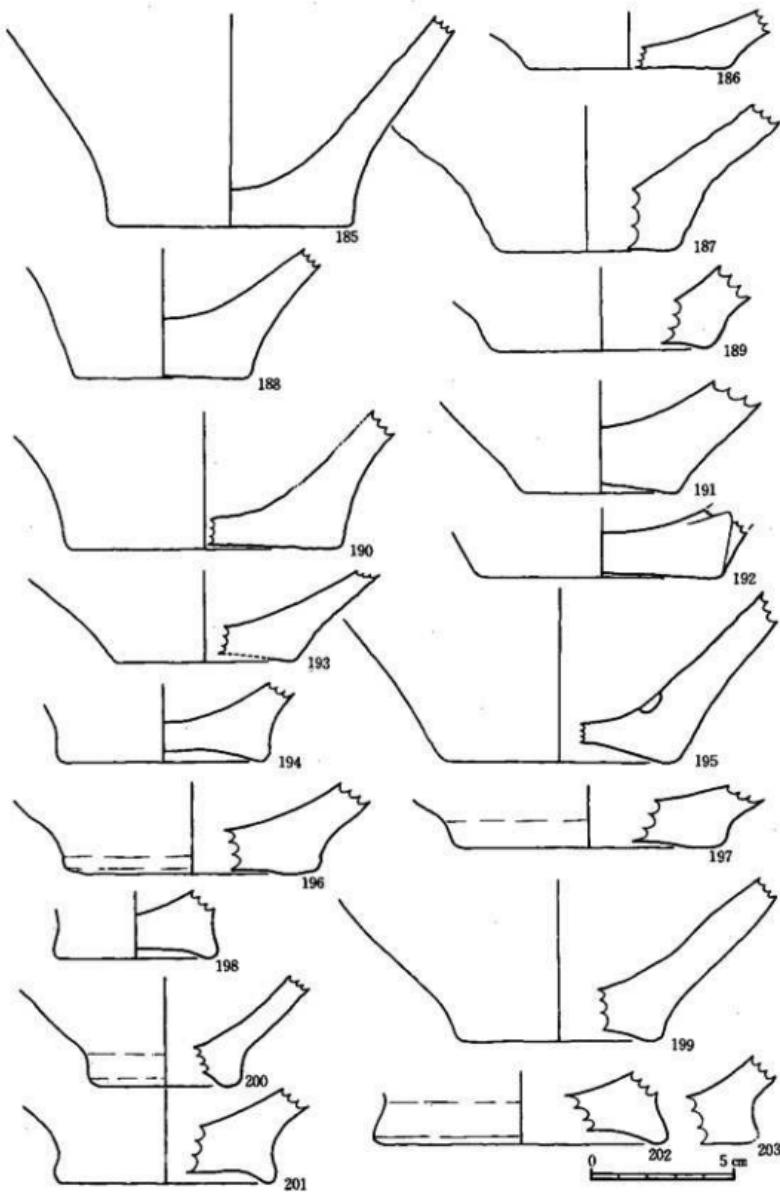
180は内外面ともいねいに研磨されている。181は口縁部がわずかに肥厚する。183は内面



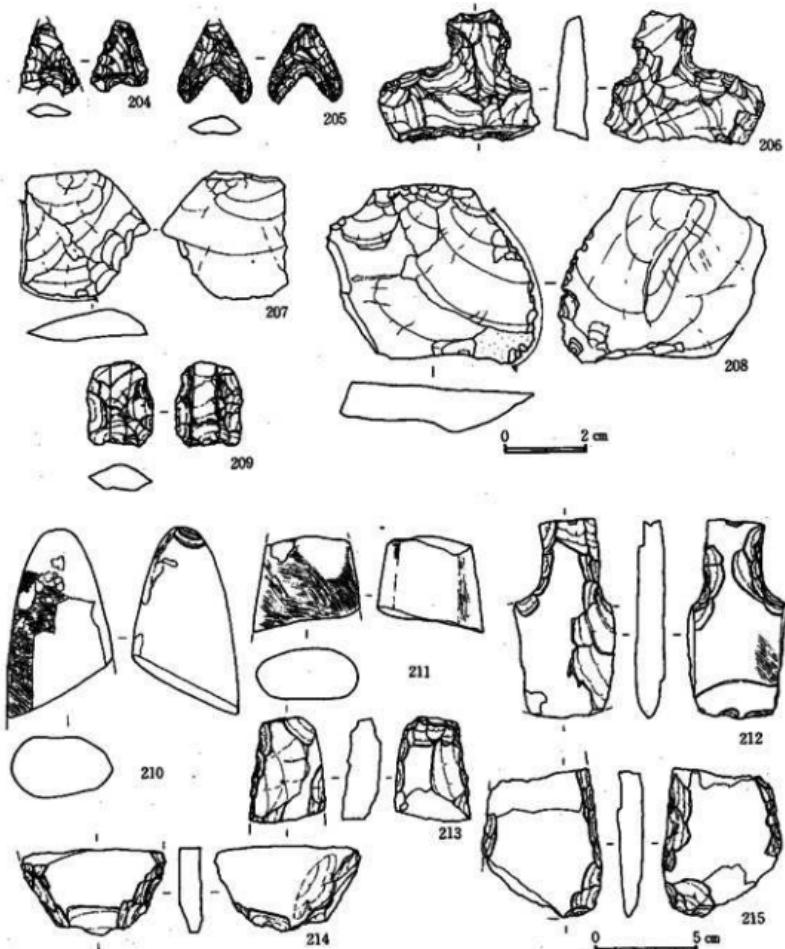
第31図 A地点出土遺物(9)



第32图 A地点出土遗物(10)



第33図 A地点出土遺物(II)



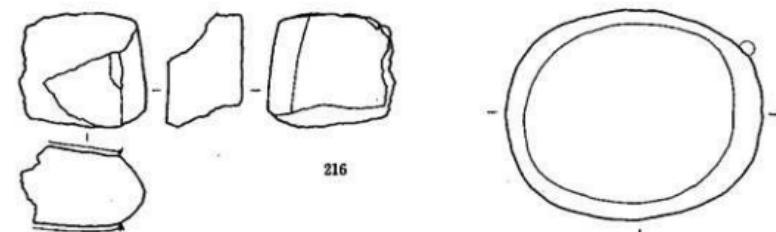
第34図 A地点出土遺物⑫

はミガキ仕上げで、外面に網目状圧痕の組織痕をもつ底部である。

184は弥生土器の菱形土器の口縁部と考えられるものである。外面にススが付着する。

底部（第33図）

底部はいずれも深鉢形土器のものと考えられる。形態により次のように分けた。a：ゆるくカーブしながら胴部へ続くもの（185～190, 199）、b：ほぼ直線的に続くもの（191～193）。



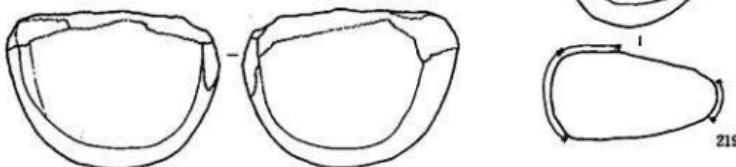
216



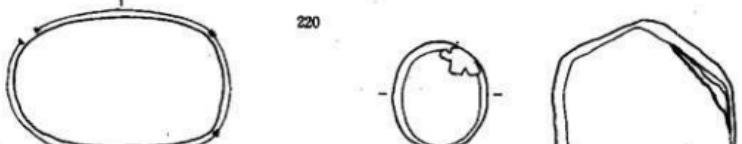
217



218



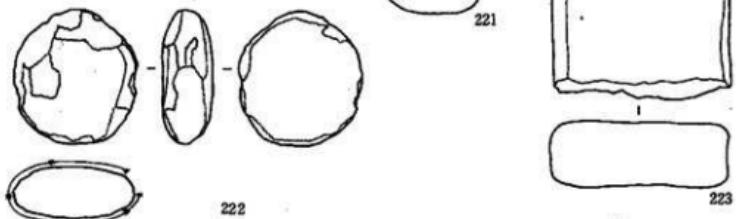
219



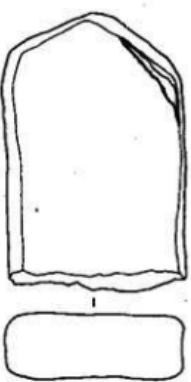
220



221



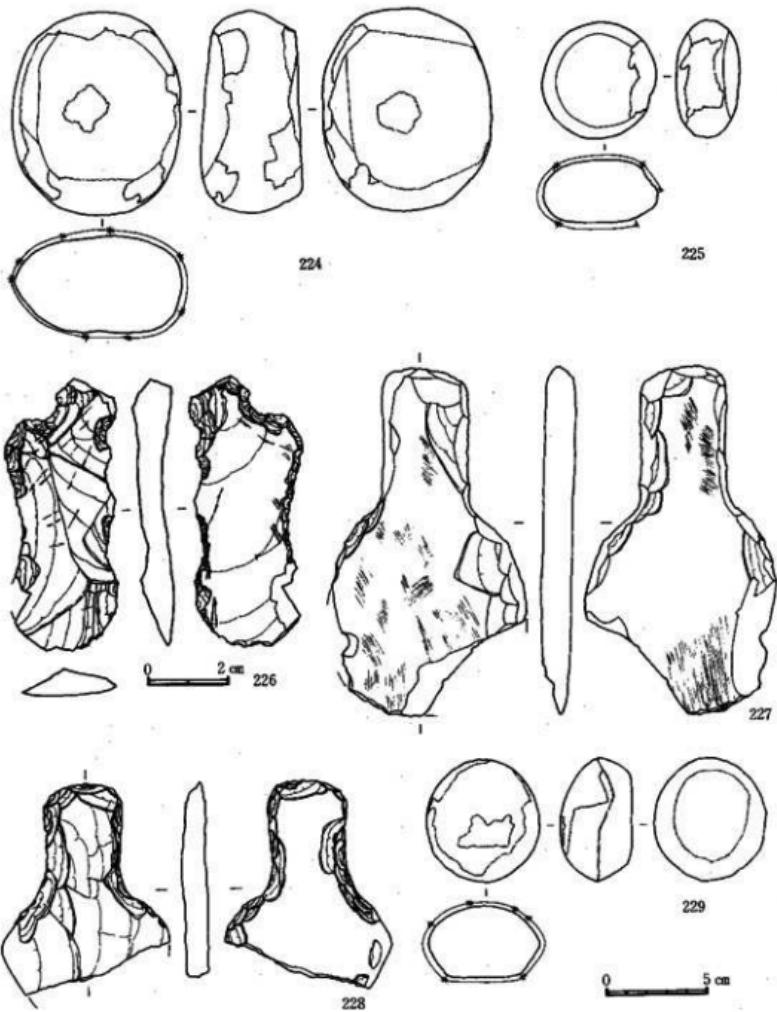
222



223

0 5 cm

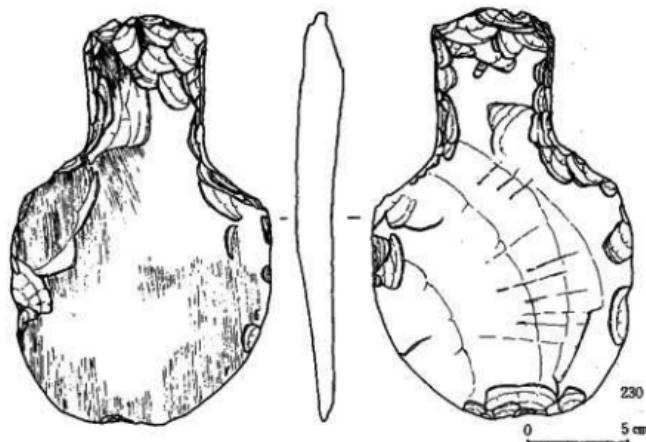
第35図 A地点出土遺物(13)



第36図 A地点出土遺物(14)

195)、c : ほぼ垂直に立ち上がり肩部へ続くもの (194, 196, 197, 200)、d : 端部が張り出るもの (198, 201~203)。188~202は上底をなす。185, 188は内面にススの付着が認められる。

石器 (第34~37図)



第37図 A地点出土遺物(15)

204, 205は石鐵である。204は黒曜石、205は頁岩を素材としている。重さはそれぞれ0.50g, 1.00gである。206はチャートを素材とする石匙で、重さは9.05gである。207, 208はチャートのスクレイパーと考えられる。重さはそれぞれ8.11g, 28.24gである。209は石鐵の製作途中のものと考えられる。素材はチャートで、重さは2.62gである。210, 211は磨製石斧、212～215は打製石斧の欠損品である。いずれも頁岩を素材とする。216は石皿、217～225は磨石及び敲石である。218は礫質砂岩、他は砂岩である。226は頁岩を素材とした石匙である。227, 228, 230は頁岩を素材とした有肩の打製石斧であるが、227, 230は一部に研磨痕が観察される。229は頁岩を素材とするもので、磨石、敲石として使用されている。226～230はI層からの出土である。

第5節 まとめ

A地点の調査ではⅦ層から縄文時代早期の遺物と集石が1基確認された。V層からは縄文時代晩期の遺物が出土した。集石は花弁状の配石等ではなく、掘り込みも確認されず、礫は散乱した状態であったが、火を受けた痕跡が認められた。遺物について見ると、78～81, 83は口縁部がほぼ直行するものの、その文様から石坂式系のものと考えられる。97～102は押引文が見られることから、吉田式土器と考えられるものである。103～109は磨ノ神式土器と考えられるもので、109は網目状の撚糸文が見られる。いずれもⅦ層からの出土で縄文早期のものである。

V層からは縄文晩期の深鉢、浅鉢、鉢等が出土している。深鉢はそのほとんどが入佐式に比定できるものと考えられるが、153, 154は縄文後期のものと考えられるものである。浅鉢についてもほとんどが入佐式に比定されるものである。鉢については179は入佐式、183は網目状の組織痕をもつ底部で黒川式に比定されると考えられるものである。

第VI章 C 地点の調査

第1節 調査の概要

今回の調査は確認調査の結果、遺物の出土するところと考えられている部分の内、水路及び工事により削平される部分について、全面調査を実施した。

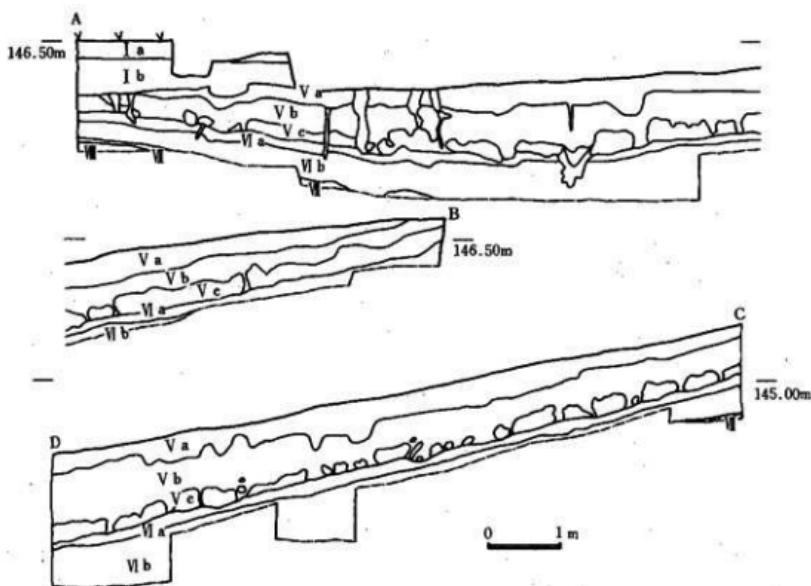
確認調査ではVI層から縄文早期の遺物が出土し、V層から縄文晩期の遺物が出土している。しかし、今回の調査の結果、VI層からはわずかしか遺物は出土せず、遺物のほとんどはV層からの出土であった。遺構は検出されていない。

第2節 層位

調査区域の現況は傾斜面の細であるが、層位はほぼ標準土層に近いものであった。傾斜は南北はわずかに中央部が凹んでおり、東西は西から東側へ傾斜している。I層はa, bに分けられ、II～IV層は確認されず1層の下はV_a層となる。V層はa, b, cの3層に分けられた。VI層はa, bの2層に分けられる。VII層及び一部VIII層まで掘り下げた。

第3節 出土遺物

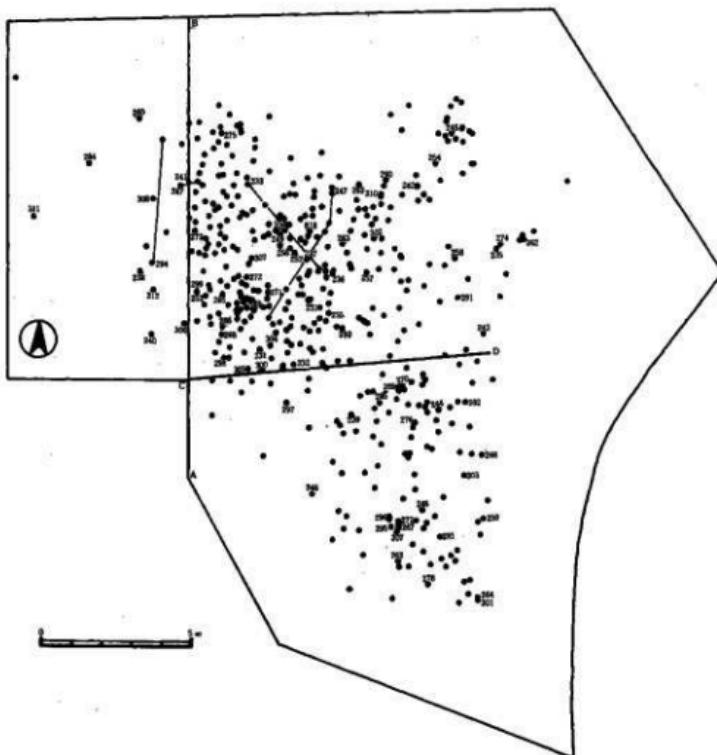
土器（第40～43図）



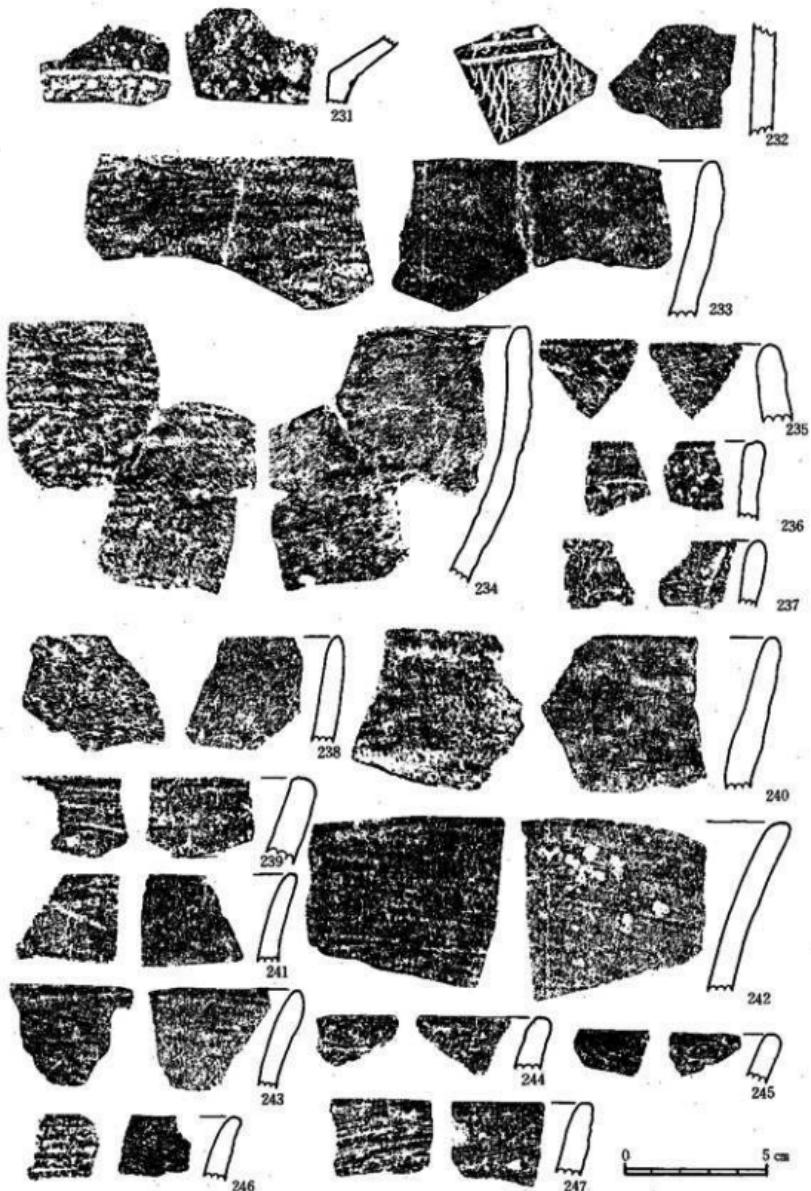
第38図 C地点土層断面図

第40図 231、232はVI層から出土した。231は大きく外反する口縁部へとつななる頸部である。横位に一条の沈線を巡らし、その下位に棒状の工具による刺突文をこれも一条巡らす。網目状撚糸文らしきものが見られるが、はっきりしない。232はLの撚りの条を右巻き後左巻きにした原体を用いた、網目状撚糸文を間隔をおいて施文した後、やや斜めの沈線を施す脚部の破片である。繩文早期の塞ノ神式土器と考えられる。

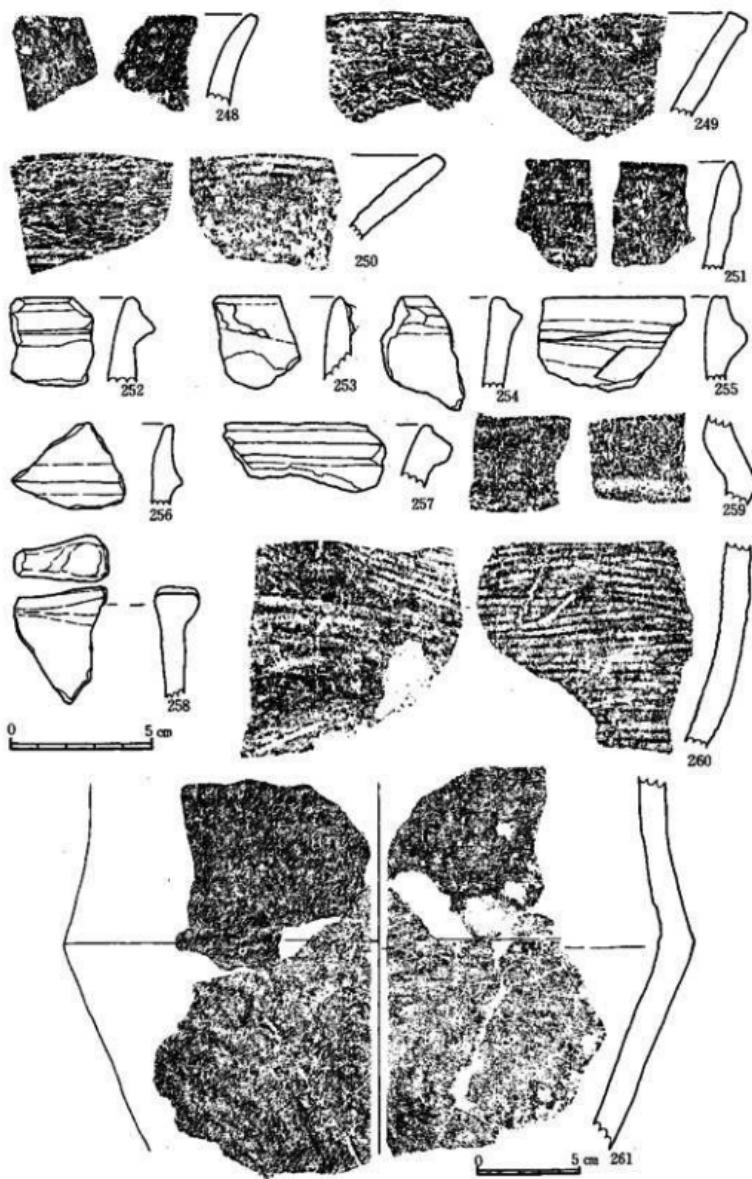
第40図 233～第41図 261は繩文晩期の深鉢形土器である。小破片が多く、全体の器形等明らかでないものが多いが、口縁部を中心に説明していく。233～237は口縁部が直口あるいは内湾するものである。233、234は外面にわずかに条痕が見られ、ススが付着する。内面は233はナデ、234はミガキ仕上げである。他は内外面ともにナデ仕上げである。238～251は外反する口縁部である。小破片のため、はっきりしないものもあるが、直線状に外反するものや、



第39図 C地点遺物出土状況



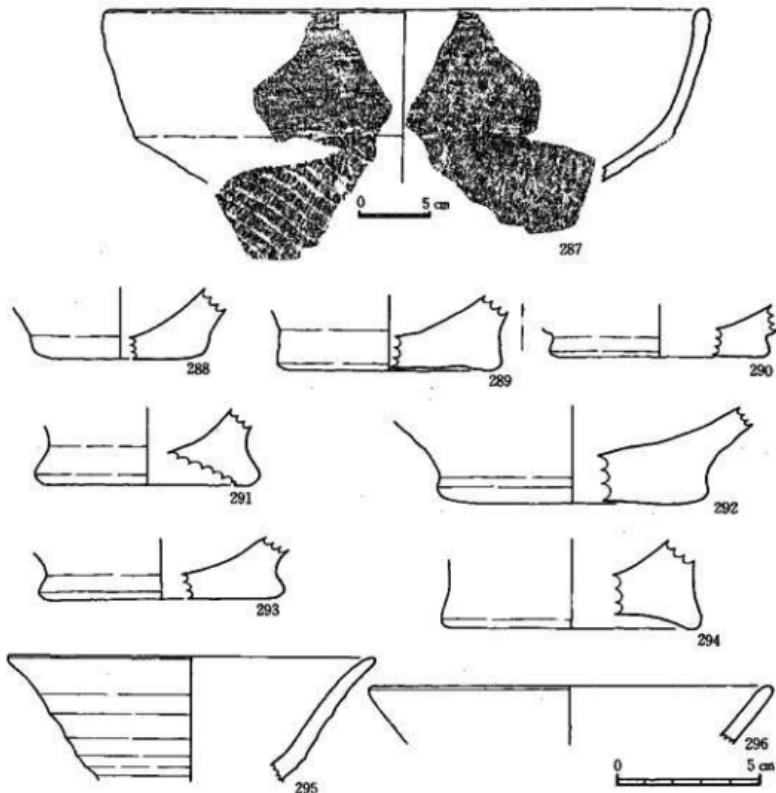
第40図 C地点出土遺物(1)



第41図 C地点出土遺物(2)



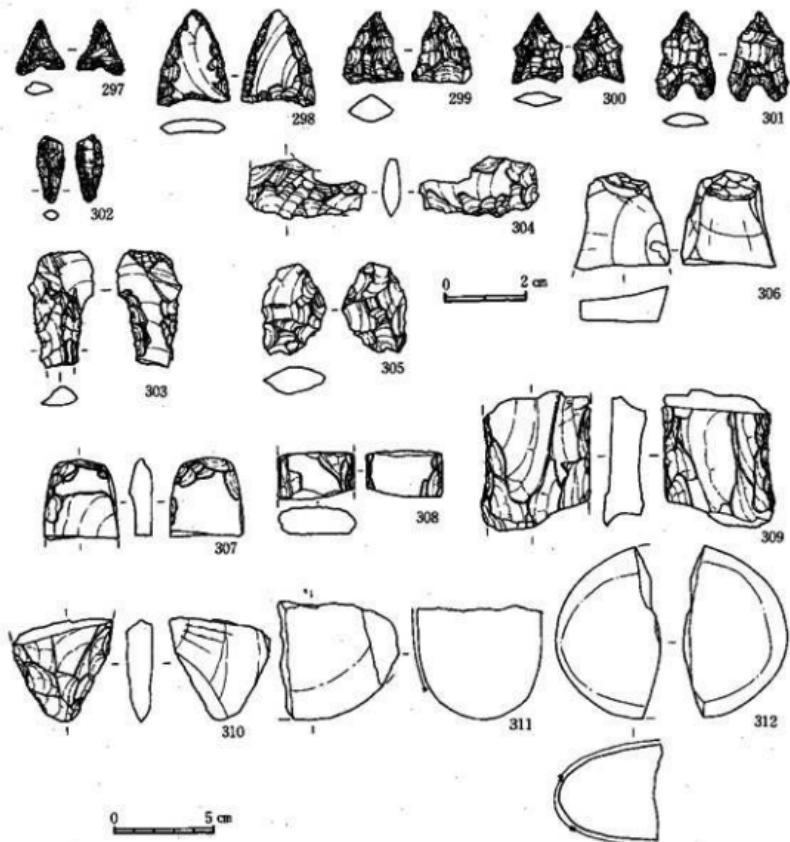
第42图 C地点出土遗物(3)



第43図 C地点出土遺物(4)

ゆるくカーブしながら外反するもの等がある。239、246は外面に、242、250は内外面ともにわずかに条痕が見られ、240は内面はミガキ、外面はナデ整形で、他は内外面ともにナデ整形である。240、241、247、249～251は外面にススの付着が認められる。252～257は口縁部近くに突帯を貼り付けるものである。252～256はほぼ直口するものであるが、257は外反する。突帯は252、254～256は断面三角形であるが、257の断面形は台形に近い。整形はいずれも内外面ともにナデ整形である。258は口縁部に棘状の突起を貼り付けるが、小破片のため全体の形状ははっきりしない。260は内外面ともに条痕が見られる。外面にはススが付着する。261は内外面ともにミガキによる仕上げで、外面にはススの付着が認められる。

262～286は浅鉢形土器である。262～263は直線的に外反する口縁部が端部でほぼ垂直に立ち上がるるもので、立ち上がり部外面に沈線を施すものである。267は口縁端部の立ち上



第44図 C地点出土遺物(5)

がり部分である。264、266は直接的に外反するもので、端部の立ち上がりではなく、内面に一条の沈線を巡らすものである。268～270は頸部で屈曲し、直線的にのびる短い口縁部が端部でほぼ垂直に近く立ち上がるもので、立ち上がり部の外面に沈線を巡らすものである。271は頸部で屈曲し外反する口縁部へと続くものである。口縁部内面にわずかな段を有する。272は直線状にのびる口縁部の内外面に沈線状のわずかな段を有するものである。273は肩部が稜を持って張り、頸部でも稜を持ちほぼ垂直に近く立ち上がり、口縁部へと続く。口縁部には中央部が凹む突起を貼り付ける。274は大きくカーブすると思われる胴部から頸部で強く屈曲し立ち上がり、口縁部となる。内面に一条の沈線を巡らす。275は強く屈曲する頸部であるが、口縁部に近い部分の断面は切断されたように磨いている。276～284は胴部である。278、282

～284は丸みを持つが、ほかは稜を持ち屈曲している。286は外面に段を有する。280は内外面ともナデ整形であるが、他は褐色または茶褐色に研磨されている。

287は屈曲し稜を持つ胸部から底部にかけて、席目状の組織痕を持つ鉢形土器である。内外面ともナデ整形である。

288～294は底部である。いずれも深鉢形土器のものである。288はゆるくカーブしながら胸部へ続く。289は端部がわずかに貼り出しが、ほぼ垂直に立ち上がり胸部へ続く。わずかに上げ底ぎみである。他は端部が貼り出すものである。294は上げ底である。いずれも整形はナデ仕上げである。

295は土師器の塊である。296は内黒土師器の塊である。

第44図は石器である。297～301は石鎌である。石材は297は黒曜石、他はチャートを用いている。重さはそれぞれ0.20g、1.34g、1.24g、0.59g、0.82gである。302は石錐、303は石錐の先端部の欠損したものと考えられる。いずれもチャートを素材としており、重さはそれぞれ0.36g、3.23gである。304はスクレイバーと考えられるものであるが一部を欠損している。チャートを素材とし、重さは1.74gである。305は石鎌の製作途中のものと考えられる。石材はチャートで重さは2.14gである。306は一部に加工が施されるが、欠損しており器種等は明らかでない。石材はチャートである。307～309はいずれも頁岩を素材とする、打製石斧の欠損品である。311、312はいずれも磨石、敲石として使用されたものの欠損品である。石材はいずれも砂岩を用いている。

第4節まとめ

C 地点の調査ではV、VI層から遺物が出土したが、VI層からは少量の土器片が出土したのみであり、遺物のほとんどはV層から出土したものである。

231、232はいずれも縄文早期の塞ノ神式土器であり、VI層からの出土である。

233～261は縄文晚期の深鉢形土器である。小破片のため傾きなどのはっきりしないものもあるが、大半は入佐式に比定されるものと考えられる。252～257は口縁部に突帯を巡らすものである。型式等ははっきりしないが、256は入佐式に類似する。

262～286は浅鉢形土器である。262～271は入佐式に比定されると考えられるものである。

273、274は黒川式土器の鉢形土器と考えられるものである。

287は黒川式土器の鉢形土器と考えられるもので、底部に席目状の組織痕文をもつ。石器は石鎌、石錐、スクレイバー、打製石斧、磨石、敲石等が出土している。

第VII章 B 地点の調査

第1節 調査の概要

道重遺跡は昭和63年度に確認調査並びに削平部分についての面調査が実施されている。今回は、その面調査部分の東側に当たる幹線道路部分についての調査を実施した。道路部分であるので、調査区は幅5m、長さ約80mの範囲である。中央部に旧畠地の進入路があり、これを工事に伴って重機の進入路として用いたと思われ、攪乱を受けている。確認調査時に、縄文時代晚期・早期の包含層が確認されている。前回の確認調査時の10トレンチが、調査域のほぼ中央にあったために、南側から斜面に2×5mのトレンチを、10m隔てて2ヶ所トレンチ設定し、北側の畠地の中央に3×4mのトレンチを設定した。その結果南側では自然の斜面をそのまま残し、表土の下はアカホヤ層（V層）となっていた。また北側においては、既に工事の終わった圃場側に縄文時代晚期の包含層（II層）が僅かに残っていたが、ほとんどの部分で表土の下に縄文時代早期相当層のVI層が検出された。これにもとづいて、南側については重機によってアカホヤ層をはぎ取り、以下順次掘り下げを行った。3トレンチでは、薩摩層の下から剥片が出土したため、全面にわたって2次シラスまで調査を行った。調査面積は約500m²、平成元年10月2日㈬から10月24日㈫まで調査を行った。また便宜上、中央の攪乱部を境にして、北区・南区とする。

第2節 遺構（第49図・第50図）

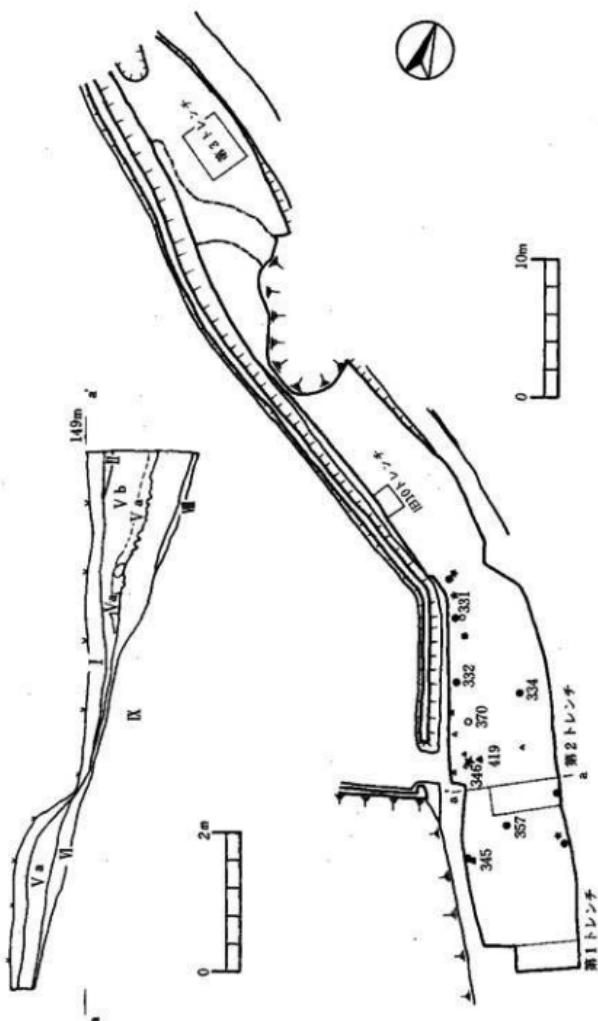
南区でVI層=薩摩層上面に、集石を検出した（第49図・図版11）。縄文時代早期に相当する。集石に共伴する遺物は確定できなかった。北区では、仮設定したトレンチの北隅から、チャートを中心としたチップ・フレークの集中するPitを検出した。薩摩層の上から掘り込まれており、時期は縄文時代早期にあたると考えられる。石器製作跡と考えられるが、石核と剥片が出土し、トウールの出土は、このPitからはなかった。石材は、タンパク石・チャート（白）の2種類が中心である。

第3節 遺物（第51図～第56図）

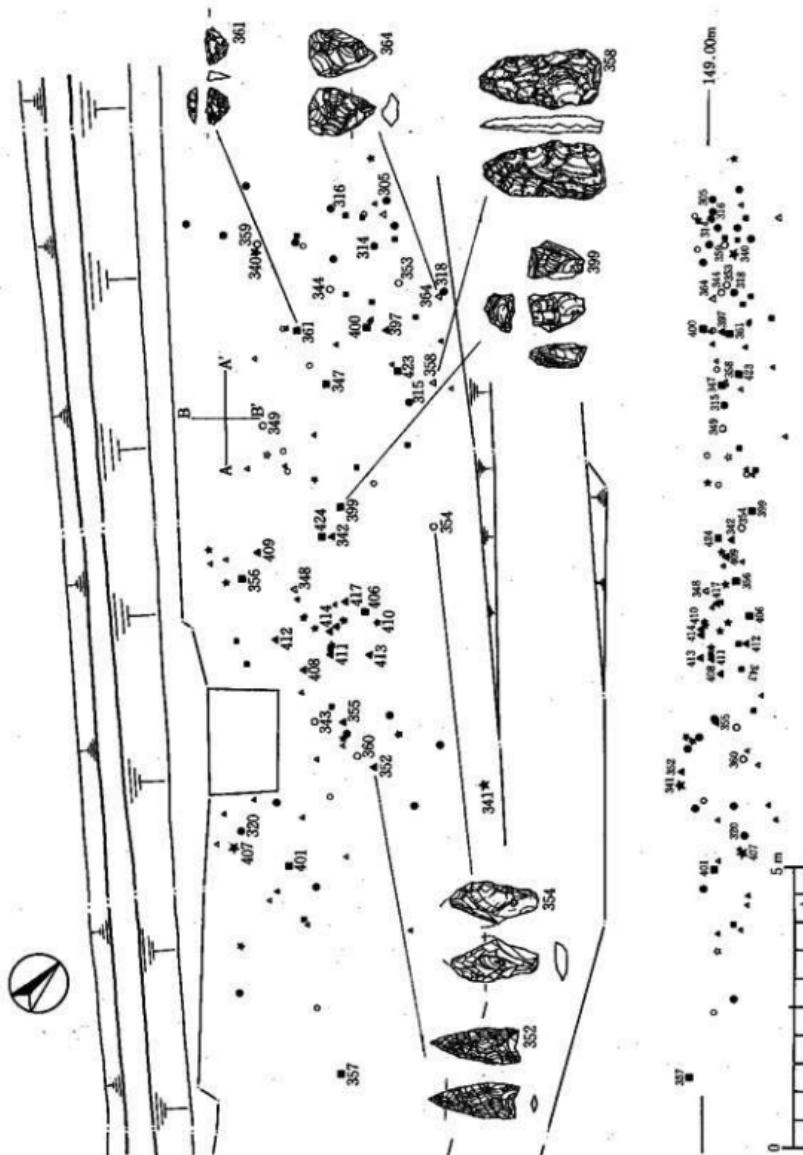
遺物は、斜面の傾斜が緩やかになる北側に多く出土し、南区の旧10トレンチ周辺と北区に集中した。遺物は、縄文時代早期から晩期にかけての土器片、縄文時代早期の石鏃、楔形石器、旧石器時代の細石核、細石刃、剥片などが出土した。北区では、土層の堆積状況がほぼ水平で、出土遺物をVI層の上層、下層を分離することができた。南区においては、土層の堆積状況に傾斜があり、遺物はVI層の直上と、VI層中に混入する状況で出土した。南区ではVI層が薄く堆積しており、VI層とV層を部分的には確認したが、面的にはV層がすぐに表出してしまい明確に分離できないまま掘り下げることとなった。北区においては、縄文時代早期層の石材と、薩摩層下の石材とが明確に分離できる。

土器（第51図・第52図）

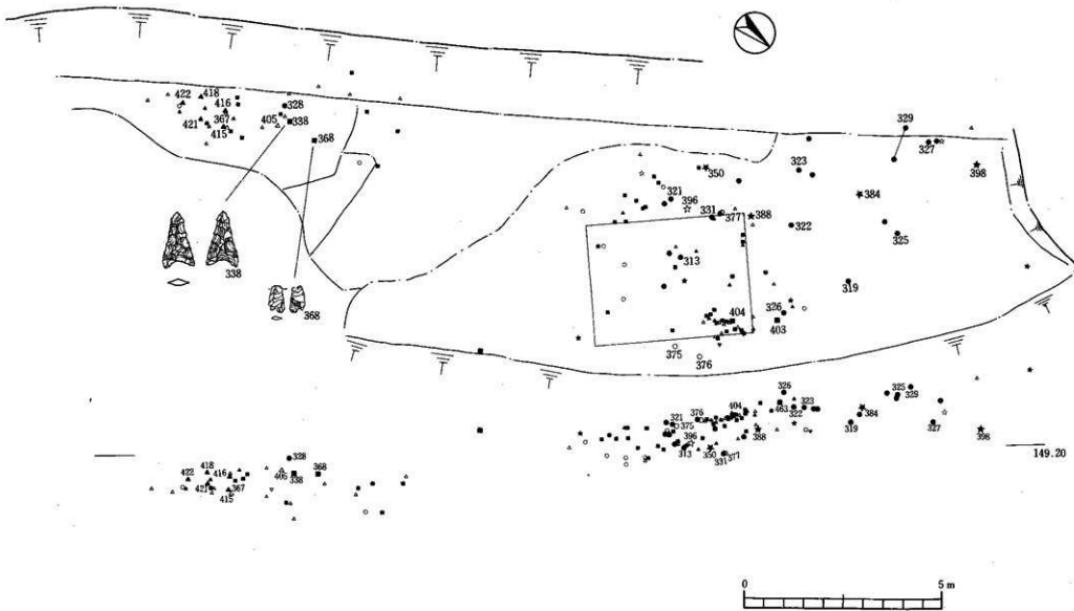
313、314は楕円押型文土器である。313は文様が深く施され、314は一部分をナデ消している。两者とも内面調整はヘラで丁寧にナデられている。315～318は貝殻文土器で、いずれも円筒形



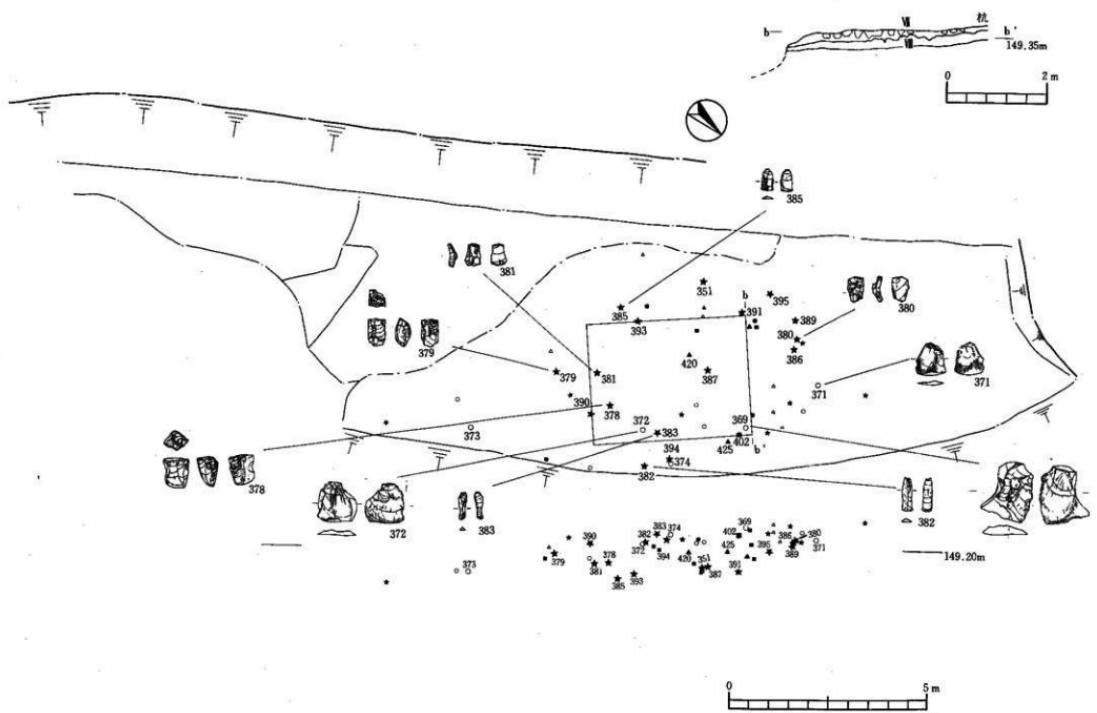
第45図 B地点発掘区全体図



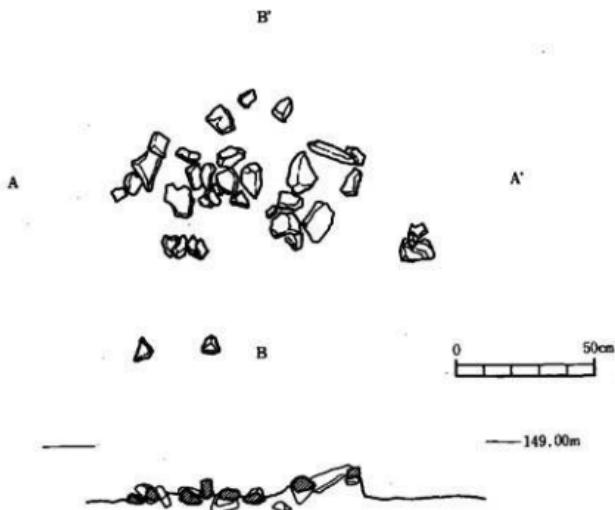
第46図 B地点南区、遺物出土状況



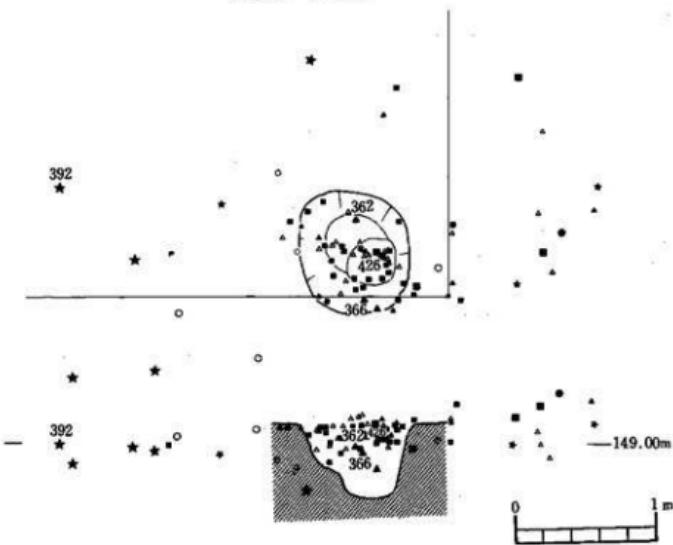
第47图 B地点、北区上层遗物出土状况



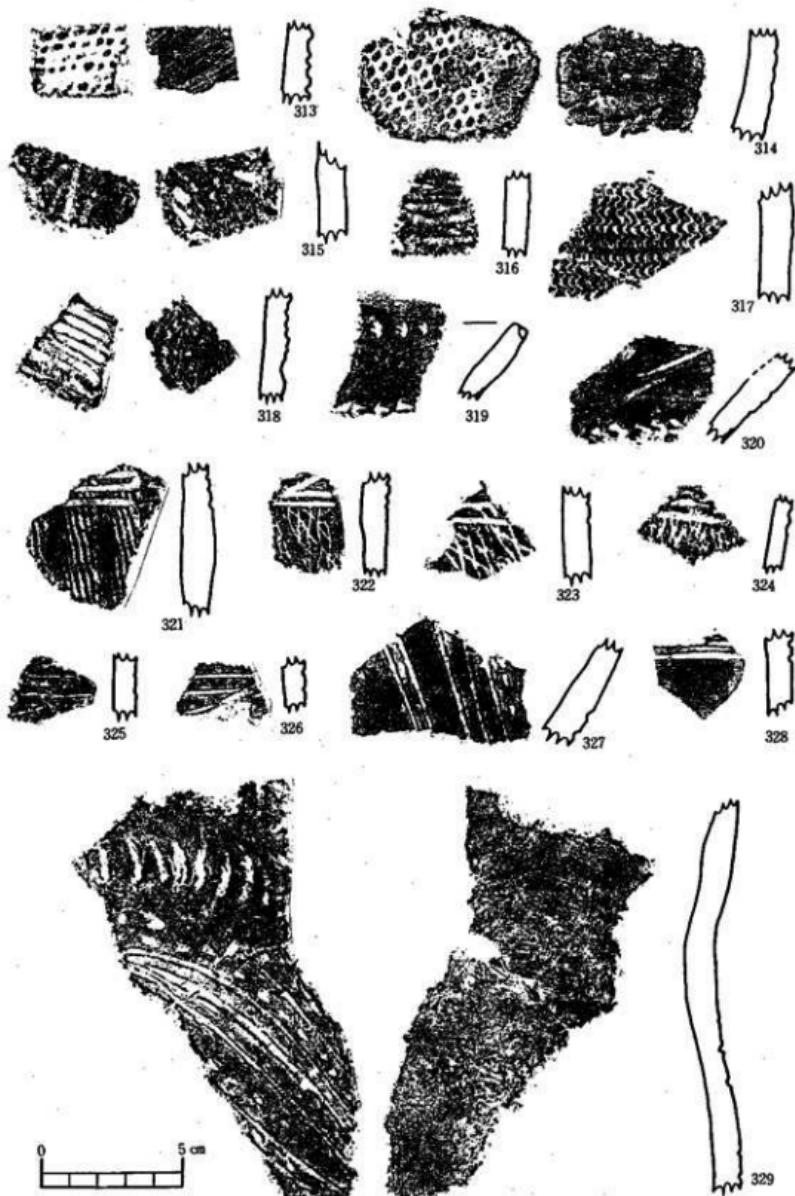
第48図 B地点北区、下層遺物出土状況



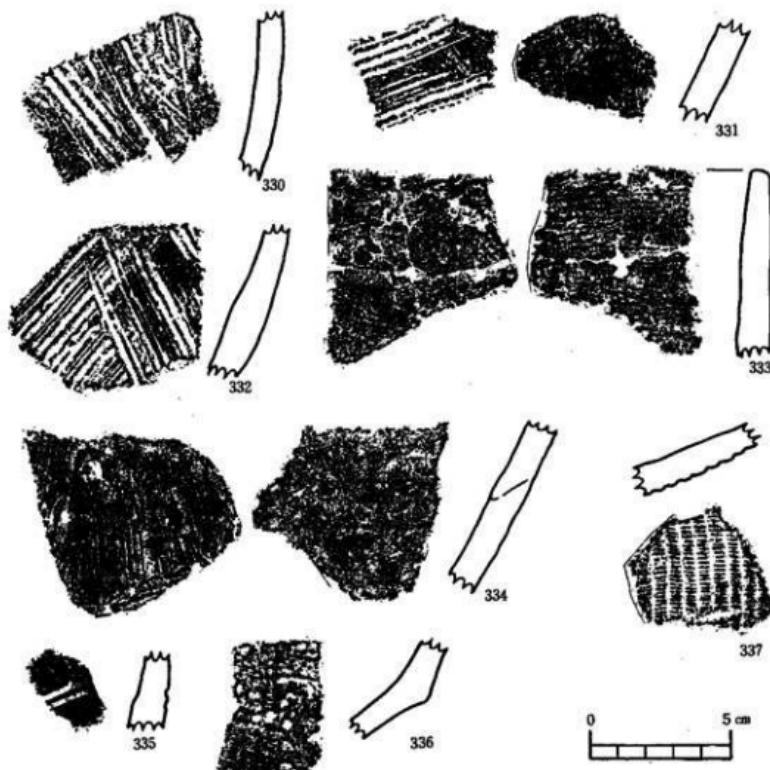
第49図 1号集石



第50図 北区 Pit 及び遺物出土状況

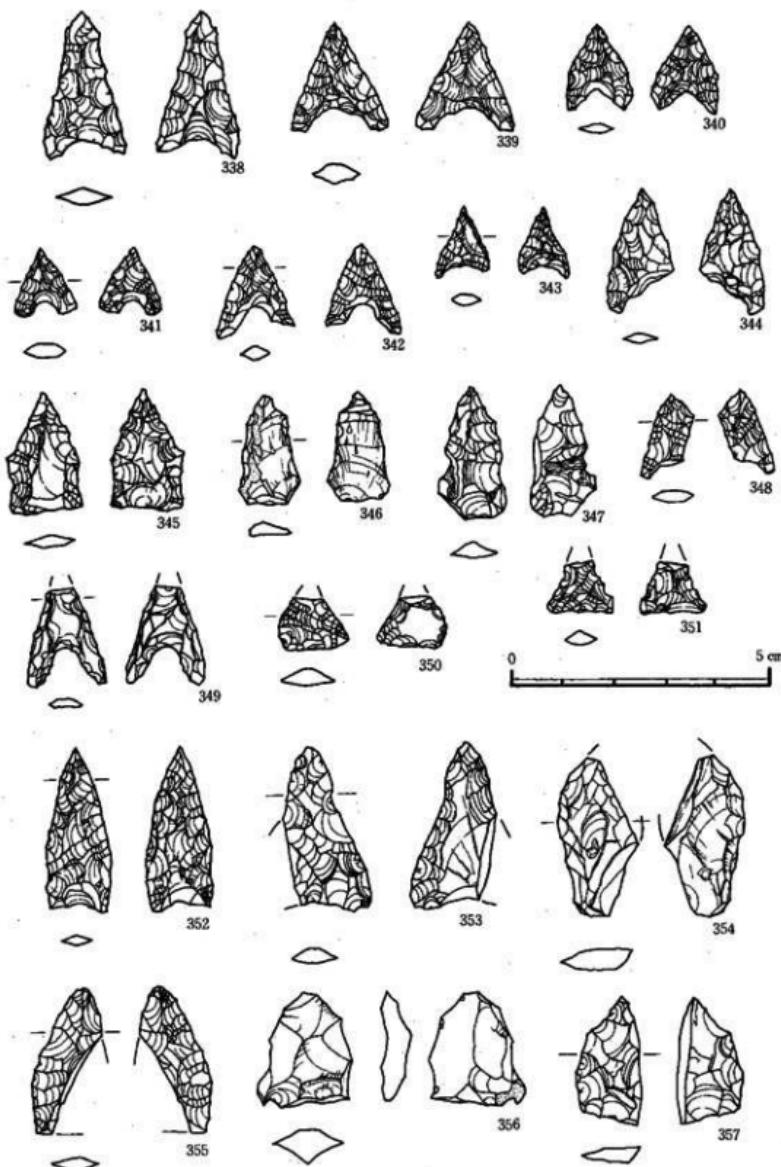


第51図 B地点出土土器(1)

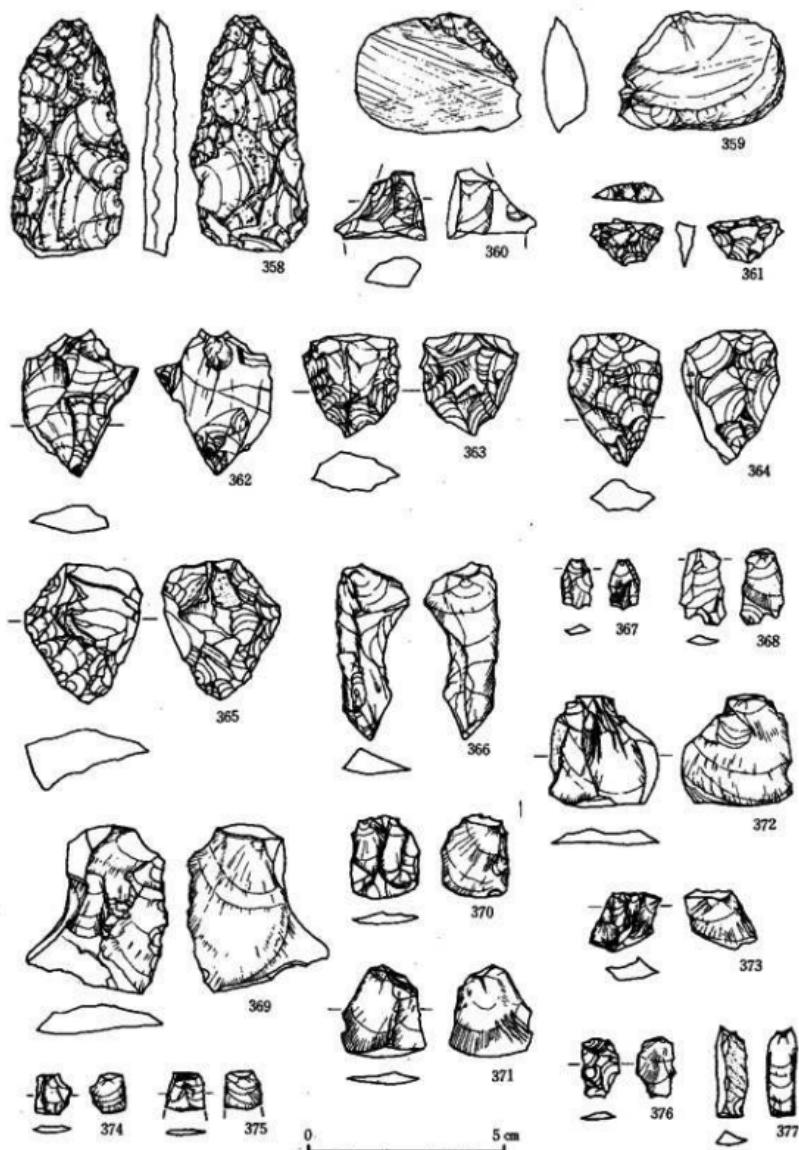


第52回 B地点出土土器(2)

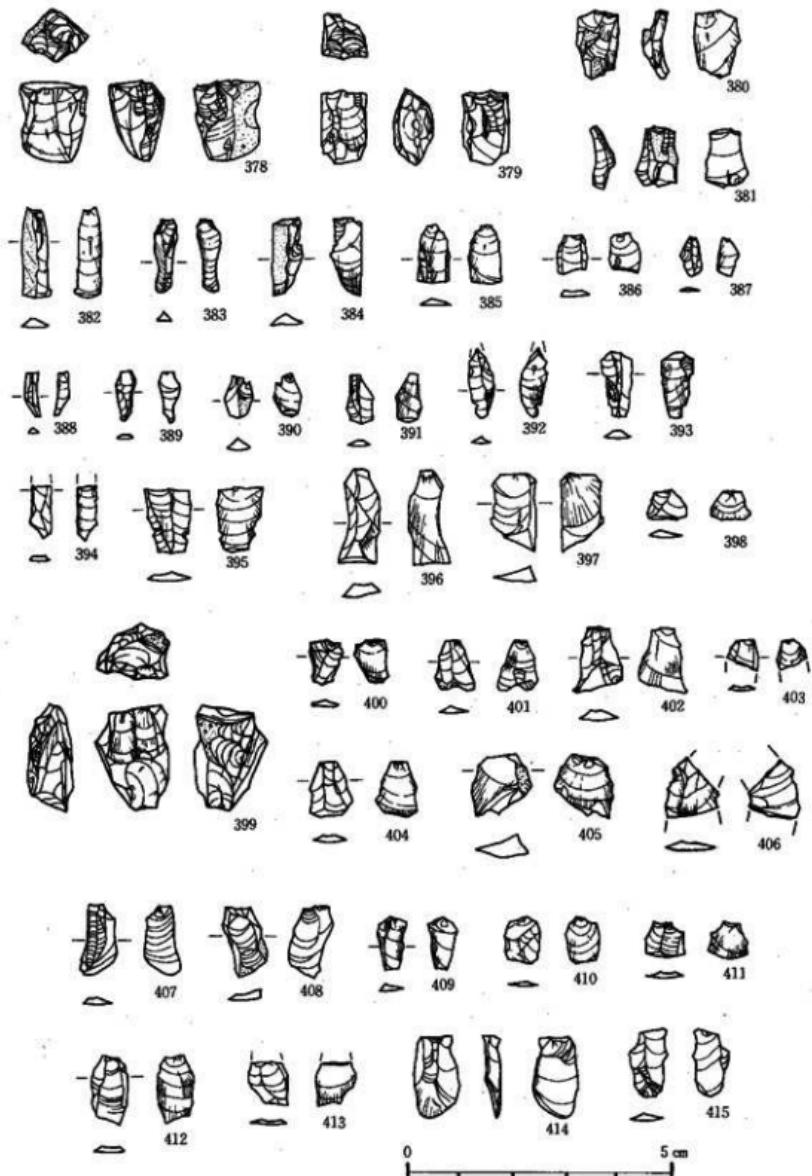
の器形をなすものと考えられる。317は、2枚目の腹縁部を縦位に用い連続刺突している。317以外は貝殻条痕を器面に残す。315は、丁寧なヘラ状工具によるナデで内面調整される。319～324は塞ノ神式土器で、319、320は口縁部で、321～324は胴部である。319、320は貝殻による連続刺突が施され、321、322、323、324はいずれも沈線と繩文を施される。321は撚糸文、322～324は網目撚糸文で、沈線による区画は有しない。原体は、322は右巻後左巻きで、条の撚りはL、323が同じく右巻後左巻きで、条の撚りがRで、他は不明である。ここまでが、VI層出土の土器で、以下はV層—アカホヤ層上位から出土したものである。325、326は、傾き不明、細く浅い沈線を施す。327、329は同一個体で、胎土に金雲母を含み、頭部に貝殻の連続刺突を、胴部はヘラ沈線と刺突を施している。内面は工具によってナデられている。これらは、文様構成から塞ノ神式土器に近似しているものと考えられる。330～332も同一個体で、粗い条痕がある。333は口縁部にあたり、口縁は直立する。ふきこぼれと考えられる炭化物の付着がある。



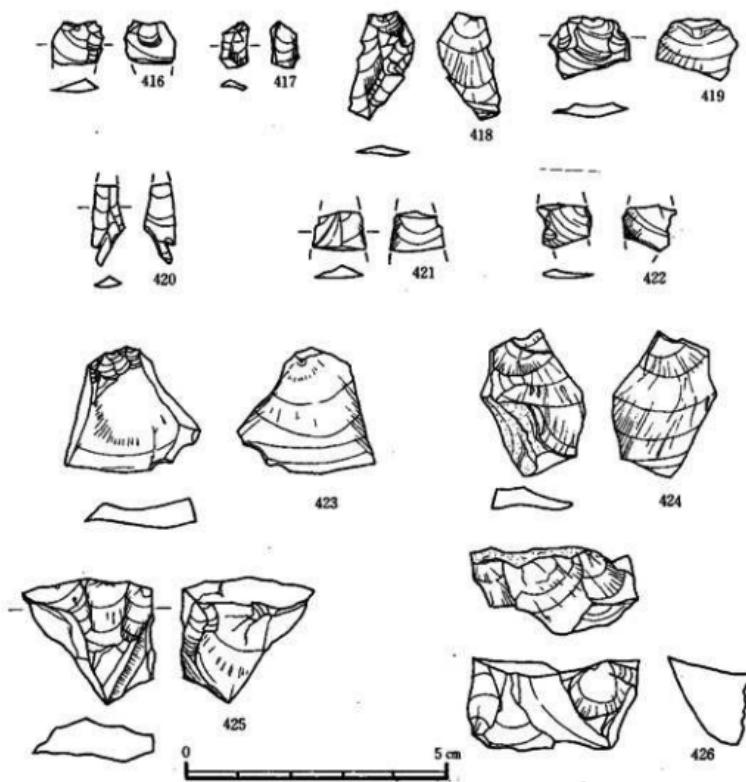
第53図 B地点出土石器(1)



第54图 B地点出土石器(2)



第55図 B地点出土石器(3)



第56図 B地点出土石器(4)

第2表 B地点石器計測表

No	器種	石材	区	層	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	備考
338	石鏃	タンパク石	北	VI	27.10	15.05	4.30	1.23	■
339	"	黒曜石	仮2T		20.15	18.70	4.65	0.97	姫島産 ★
340	"	"	南		16.65	12.60	1.95	0.35	★
341	"	"	"		12.05	11.60	3.25	0.38	★
342	"	チャート(白)	"		17.10	14.55	4.05	0.63	△
343	"	頁岩	"		13.50	10.60	3.55	0.27	○
344	"	頁岩	"		23.35	12.95	2.70	0.67	破損品 ○
345	"	チャート(黒)	"		22.15	13.60	3.75	1.21	5角形 ▲
346	"	黒曜石	"		20.65	11.25	3.80	0.78	両面に剥離面が残る★
347	"	タンパク石	"		24.15	11.80	5.30	1.29	■
348	"	チャート(白)	"		16.20	7.50	2.95	0.35	△
349	"	頁岩	"		18.60	14.40	3.50	0.57	破損品 ○
350	"	黒曜石	北	VI	9.90	12.35	3.00	0.39	破損品 ▲
351	"	黒曜石	北	VII	8.50	12.65	4.10	0.44	破損品 ★
352	"	チャート(白)	南		30.60	13.10	3.05	1.19	△
353	"	頁岩	"		31.80	13.50	5.25	2.05	破損品 ○
354	"	頁岩	"		29.95	14.50	6.00	2.62	破損品・有茎? ○
355	"	チャート(白)	"		28.30	9.85	3.65	0.89	破損品 △
356	"	タンパク石	"		20.85	16.95	6.20	1.79	■
357	"	"	"		22.65	12.10	3.50	1.00	破損品 ■
358	尖頭器	チャート(白)	"	VII	58.75	28.60	9.30	16.10	△
359	削器	頁岩	"	VI	29.25	40.80	10.70	14.14	両面を研磨 ○
360	抜入石器	流紋岩	"		22.35	16.20	7.50	2.79	破損品 ○
361	"	タンパク石	"		11.70	18.35	5.50	0.91	■
362	楔形石器	チャート(黒)	北	VI	25.80	30.90	7.10	6.46	▲
363	"	タンパク石	"		24.90	23.65	8.70	5.39	■
364	"	チャート(白)	南		33.45	23.55	11.50	7.58	△
365	"	"	"		35.20	29.15	12.30	9.92	△
366	剥片	チャート(白)	北	VI	42.70	17.90	7.45	4.15	△
367	"	タンパク石	"	"	12.45	8.30	2.85	0.25	■
368	"	"	"	"	18.45	10.95	2.55	0.48	■
369	"	砂岩(硬質)	"	VII	40.25	33.20	8.90	9.63	○
370	"	"	南		19.85	16.90	4.40	1.67	○
371	"	"	"	"	22.80	21.65	3.40	1.56	○
372	"	"	"	"	27.60	26.85	4.95	3.54	○
373	"	"	"	"	13.45	13.70	4.30	1.13	○
374	"	"	"	"	9.85	8.70	2.85	0.20	○
375	"	"	"	VI	9.40	9.70	1.95	0.18	○
376	"	"	"	"	14.20	9.10	2.30	0.31	○
377	"	"	"	"	21.95	7.50	2.90	0.51	○
378	細石核	黒曜石	"	VII	14.25	12.05	9.55	1.79	★
379	"	"	"	"	13.90	8.20	7.55	1.03	★

No	器種	石材	区	層	最大長mm	最大幅mm	長さmm	重量g	備考
380	調整刷片	黒曜石	北	VII	9.10	12.65	3.50	0.30	縦面を残す ★
381	"	"	"	"	10.60	7.90	4.05	0.34	縦面を残す ★
382	細石刃	"	"	"	16.70	6.45	1.95	0.17	縦面を残す ★
383	"	"	"	"	13.50	4.40	1.80	0.10	★
384	"	"	"	VI	14.25	5.20	4.00	0.18	縦面を残す ★
385	"	"	"	VII	10.75	5.90	1.50	0.08	★
386	"	"	"	"	6.80	5.35	1.45	0.08	★
387	"	"	"	"	6.50	3.55	0.80	0.01	★
388	"	"	"	VI	7.55	2.26	1.20	0.02	★
389	"	"	"	VII	9.15	3.35	0.90	0.03	★
390	"	"	"	"	8.50	3.95	2.65	0.08	★
391	"	"	"	"	8.30	4.35	1.05	0.05	★
392	"	"	"	VI	12.70	4.55	1.35	0.06	★
393	"	"	"	VII	11.70	6.70	2.00	0.12	★
394	"	"	"	"	9.50	3.75	1.20	0.04	★
395	"	"	"	"	12.20	8.50	1.70	0.17	★
396	剥片	黒曜石	"	VI	17.45	7.05	3.05	0.30	姫島産 ★
397	"	"	南		13.90	8.25	4.05	0.28	姫島産 ★
398	"	"	北	VI	5.15	7.80	1.15	0.04	姫島産 ★
399	細石核	タンバク石	南		18.60	13.20	8.40	2.24	縦面を残す ■
400	細石刃	"	"		9.40	7.00	1.60	0.09	■
401	"	"	"		8.50	6.30	1.45	0.07	■
402	"	"	北	VII	11.40	8.95	1.85	0.19	■
403	"	"	"	VI	5.55	5.10	1.15	0.04	■
404	"	"	"	"	9.95	7.95	1.20	0.12	■
405	"	"	"	"	9.75	9.85	3.60	0.42	縦面を残す ■
406	"	"	南		11.50	10.00	1.55	0.19	■
407	剥片	チャート(黒)	"		12.95	6.60	2.50	0.18	▲
408	"	"	"		12.60	6.85	2.00	0.18	▲
409	"	"	"		9.70	5.25	1.55	0.07	▲
410	"	"	"		8.25	6.05	1.00	0.05	▲
411	"	"	"		6.45	7.40	1.20	0.05	▲
412	"	"	"		12.35	7.25	1.15	0.10	▲
413	"	"	"		7.65	7.50	0.70	0.06	▲
414	"	チャート(白)	"		14.80	8.20	3.00	0.36	△
415	"	"	北	VI	12.75	7.20	1.90	0.14	△
416	"	"	"	"	9.40	7.70	2.85	0.26	△
417	"	"	南		8.20	4.60	1.50	0.07	△
418	"	"	北	VI	29.25	9.95	2.20	0.45	△
419	"	"	南		9.55	15.45	2.25	0.37	△
420	"	"	北	VII	14.80	6.10	2.15	0.17	△
421	"	"	"	VI	10.40	7.90	2.45	2.22	△
422	"	"	"	"	8.05	9.60	1.65	0.15	△

No	器種	石材	区層	最大長mm	最大幅mm	厚さmm	重量g	備考
423	剥片	タンパク石	南	22.95	24.50	4.65	2.69	■
424	"	"	"	19.45	26.00	5.45	2.14	■
425	石核	チャート(黒)	北	VII	28.20	19.00	8.30	4.05
426	"	タンパク石	北	VI	30.70	18.20	14.95	9.08

334は底部に近い。337は組織痕土器で、内面はヘラミガキされる。

313~324は縄文時代早期に、325~329は縄文時代前期に、330~337は縄文時代晩期に、それぞれ相当する。

石器（第53図～第56図）

338~357は石鎌として分類した。凹基のものと（338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 348, 349, 352, 353）、平基（345, 346, 347, 350, 351, 355, 356, 357）の他に、354は有茎石鎌の可能性が高い。凹基のもので、340はV字状の抉りを、341, 342, 349はU字状の抉りをもつ。345は五角形を呈する。346は両面に剥離面を残し、縁辺に調整を施す。348は脚の片側を欠損後に、その欠損部に丁寧な剥離を施している。352は長辺鎌で、基部に浅い抉りを施す。353は剥離面を残し、両側縁は内湾し、抉りは浅い。358はV層の薩摩層から出土した尖頭器である。362~365は楔形石器で、特に362に使用時の痕跡がうかがわれる。366~368は両極打法による剥片である。369~377はV層から出土した剥片で、この石材はV層のみで、北区に限定されて使用されている。

378~395は黒曜石を石材とする細石核と細石刃および調整剥片である。細石核は小型でいずれも打面調整がなされる。378は背面および打面の一部に疊面を残し、小円錐を起源とすることが分かる。380, 381は調整剥片で、それぞれ一部に疊面を残す。399はタンパク石の石材の細石核で、打面、側面とも調整され、背面に疊面を残す。400~406はタンパク石の細石刃である。399の出土によって細石刃を認識することとなったため、黒曜石のもののように、すべてを発掘地点・層位ともおさえることができず、網羅できなかった。407~422はチャートを石材とする剥片であるが、細石刃の可能性があると考えて図化した。425, 426は石核である。その他、詳細については石器計測表にある。

第4節 まとめ

B地点の調査は、良好に残存していた層がV層以下であって、時期が縄文時代早期と先土器時代に限定され、特に石器において興味深い資料が出土した。352~358はV層=薩摩層直上あるいはV層中に出土したもので、資料数は少ないが縄文時代草創期の石器を考える上で貴重である。こうした遺物とタンパク石を石材とした399の細石核は南区から出土し、北区の上層の縄文時代早期のPitと、北区の下層から先土器時代の369~395の遺物が出土していることで、時期・石材・エリアのいずれも3時期に分離することが可能である。黒曜石の細石核は、志布志町倉園B遺跡・溝辺町石峰遺跡・栗野町麦生田遺跡・川内市成岡遺跡から出土している。川内川流域に遺跡が多い。

図版



確認調査区域遠景



調査風景（24トレンチ）



11トレンチ



18トレンチ



14トレンチ



19トレンチ



12トレンチ



10トレンチ

図版2



4 レンチ



22 レンチ



1 レンチ



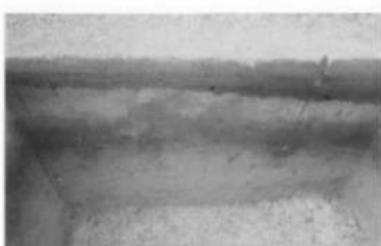
15 レンチ



16 レンチ



2 レンチ



2 レンチ



3 レンチ



7 レンチ



8 レンチ



9 レンチ



17 レンチ



6 レンチ



13 レンチ

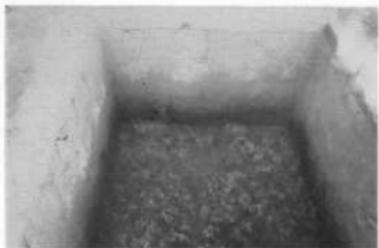


23 レンチ



21 レンチ

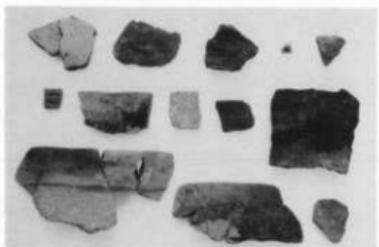
図版 4



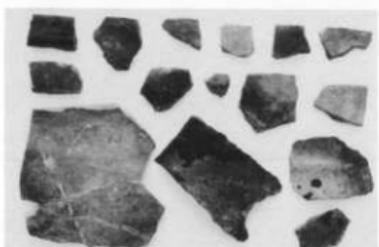
21トレンチ



24トレンチ



1~13



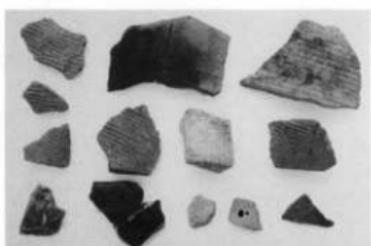
14~28



29~46



47~57



58~70



71~81



A 地点遠景



A 地点調査風景



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



集石

図版 6



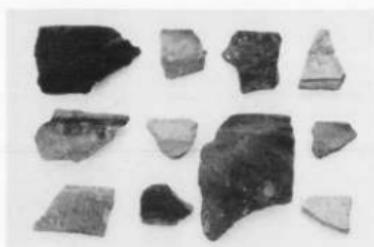
82～93



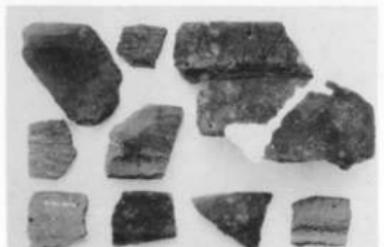
94～111



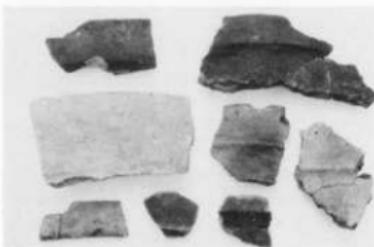
112～116



117～127



128～136



137～144



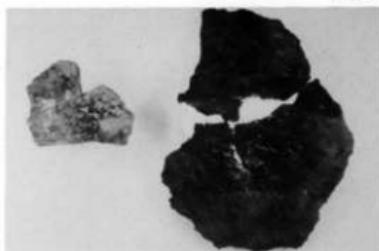
145～158



155・159～163



108. 165 ~ 179



180. 261



181



182 ~ 184, 187, 189, 193, 199, 200



185, 186, 188, 190 ~ 192, 194.
195 ~ 198, 201 ~ 203



204 ~ 209



210 ~ 215



216 ~ 220

図版 8



221～225



226～230



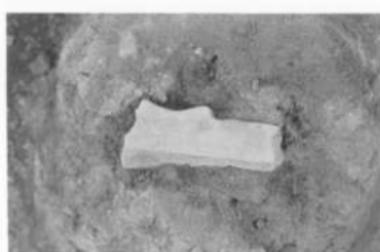
C 地点遠景



C 地点調査風景



遺物出土状況



遺物出土状況



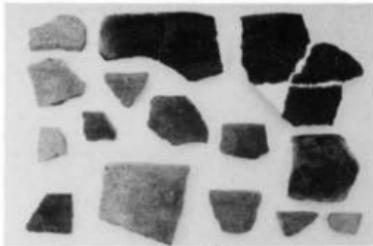
遺物出土状況



土層断面



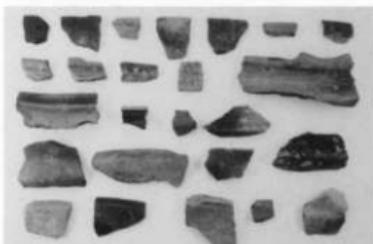
C 地点土層断面



231～245



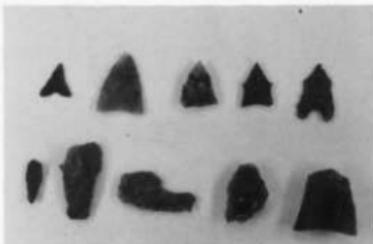
246～260



262～286



287～296



297～306



307～310



311・312

図版10



道重遺跡B地点発掘区全景



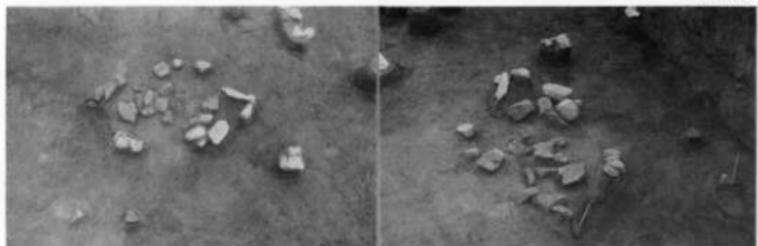
表土剥ぎとり



表土剥ぎとり



発掘作業状況



1号集石検出状況



南区遺物出土状況



北区遺物出土状況



北区土層



No358 出土状況



No352 出土状況

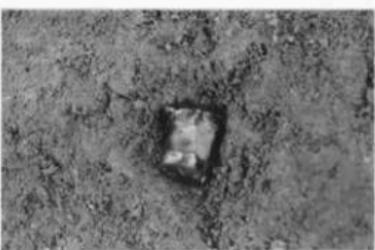


No340 出土状況

图版12



出土状况 No.379



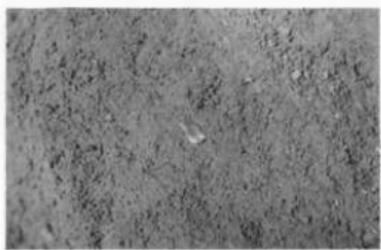
出土状况 No.378



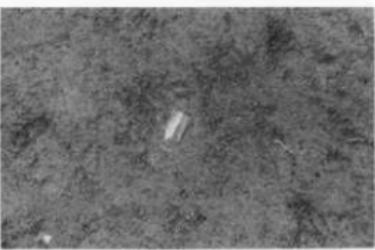
出土状况 No.382



出土状况 No.393



出土状况 No.391



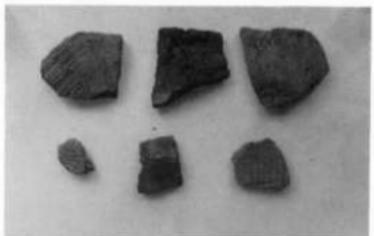
出土状况 No.385



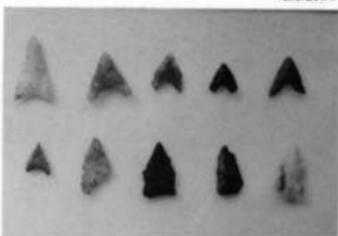
出土土器 (313~324)



出土土器 (325~331)



B地点出土土器 (332～337)



B地点出土石器 (338～347)



出土石器 (348～357)



出土石器 (358～362)



(363～365)



(366～368)



(369～377) 表



同裏

図版14



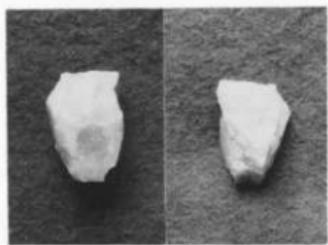
(378～381)



(382～390)



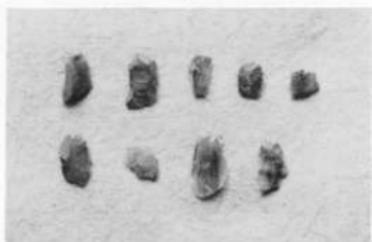
(391～398)



(399)



(400～406)



(407～415)



(416～422)



(423～426)